

「妾」に嗣子誕生を切願した象山の女性観

坂 本 保 富

目 次

- はじめに 敢えて象山の妾問題を取り上げる研究の意図と課題
- I、象山研究における妾問題の捉え方の歴史
- II、明治の近代日本における妾の問題—森有礼の「妻妾論」
- III、象山における妾の存在意義—一家の存続と生きる支え
- IV、門人海舟の妹の順子との結婚—結婚年齢と年齢格差
- V、嗣子なき故に佐久間家が辿った悲運の歴史
- おわりに 日本近世社会の家制度と妾の役割

はじめに 敢えて象山の妾問題を取り上げる研究の意図と課題

時代や国家あるいは民族や宗教などの相違により、夫婦など男女関係の在り方に関する慣習や法規には相違があり、実に様々である。日本の近世江戸時代が終焉し、明治の近代社会を迎えて、なおも「妾」(側室)の制度は、古代以来の歴史的慣例として公認されていた(天皇や大名諸侯など高貴な身分の場合は「側室」、下級武士や庶民の場合は一般に「妾」と呼ばれた。特に武家の場合は藩の戸籍上では「召使い」の名称を使用した。以下の本稿では、武家の場合を扱う故に、「召使い(妾)」で統一して使用する)。

日本で、妾に関する国家の法的規定がはじめてなされたのは、司法卿の江藤新

平（1834-1874、肥前佐賀藩出身）の下で明治3年（1870）に布達された「新律綱領」においてであった。そこでは、妾の存在の長い歴史の実態を追認して、妾は正妻と同等の「二等親」（二親等：祖父母・継母・兄弟姉妹・妻妾・孫・姪など）が同列とされ、「妻」と「妾」が同等の「二等親」と規定されるという法的地位が認定されたのである¹⁾。その経緯を、明治学院大学教授の村上一博氏は次のごとく説明している。

明治三年一二月二十日（布告第九四四）内外有司に頒布された新律綱領により、妻とともに夫の二親等すなわち配偶者と定められたが、明治一五年一月から施行された旧刑法（明治一三年七月公布、太政官布告第三十六号布告）では、妾に関する条項はすべて削除され、これ以後、法規定上での妾は消滅した。それにもかかわらず、庶民間では、蓄妾の弊風がきわめて広汎に存在していた……²⁾。

叙上のような明治の近代に入り法的規定がなされる前の幕末期には、当然、妾制度の慣習は何ら法的に問題はなく、至極当然のこととして認知されていた。幕末期に開国進取・文明開化を唱え、女性理解にも開明的であった思想家の佐久間象山（1811-1864）の場合は、妻妾を迎える順番が逆になり、晩婚で42歳（数え年、以下同様）で正妻を迎える前の30代前半には、2人の妾（藩の戸籍上の身分は「召使い」）を迎え、嗣子を含めて三男一女をもうけていた。だが、不幸にも次男以外の3人は誕生後、間もなく夭折してしまう。その後、象山は、42歳にして門人・勝海舟の妹・順子（お順）を初めて正妻として娶るが、彼女は17歳、兩人は25歳もの年齢差があったのである。象山が望んで結婚した彼女ではあったが、象山の切なる期待に反して、彼女は子宝に恵まれない女性であった。

ペリー（Matthew Calbraith Perry, 1794-1858）が日米和親条約の締結のために再来日する嘉永7年（1854）の4月、門人・吉田松陰がペリー提督の戦艦に乗船して米国密航を企てるという大事件が起きる。恩師の象山も、松陰に密航を扇動したとの罪で幕府に捕縛され、以後9年間、地元の信州松代で蟄居生活を強いられることになる。正妻と妾とが妻妾同居する信州での蟄居生活を送っていた象山は、安政年間以降、特に50歳を過ぎた晩年になると、佐久間家の存続を何として

も担保すべく、殊更に嗣子の誕生を切願するようになり、心身健康で相応の身分や教養のある女性（妾）の斡旋方を、後世に遺る書簡をもって知人に依頼するのである。

管見の限りでは、後述する勝海舟（1823-1899）や渋沢栄一（1840-1831）の場合も含めて、妾の周旋を他人に依頼する文章を書き残した人物は、象山以外に見当たらない。本来、この種の話は、後世に残るが故に、文章にはしないものである。だが、謹厳実直な武士道を生きる几帳面な学者であった象山は、嗣子の誕生を切願する書簡を書き遺し、その内の数通が『象山全集』に収められているのである³⁾。その書簡によって、現代日本の民主主義に基づく一夫一婦制の視座から、時代に先駆けた偉人である象山の思想と行動の先駆性や革新性は、妾を抱えていたという思想的な前近代性で相殺される。特に昭和戦後の歴史学界において、後述するごとく、妾を抱えて生きた象山は人格的な批判と否定を受けてきた。

動乱の幕末期といえども、人間は存在の全てが旧慣旧習の家制度に規定されていた。特に武士の場合、家制度の縛りは厳しかった。有限な存在である人間は、家の存続を媒介として幾世代にも亘って生死を重ね、子々孫々、生命の継承を図ることができた。家の存在こそは、有限な人間存在を無限化する本質的な機能を有していたのである。特に武家社会では、家を継承する嗣子がいなければ御家は断絶する。何故か。収入に相当する武家の俸禄は、当主個人ではなく、家禄として嗣子の存在する家に対して賦与される生活保障制度であったからである。例え戦で当主が戦死しても、幼児であっても嗣子が存在すれば家禄は担保され家は存続し、家族の生活は保障されたのである。

象山は、偉大な学者であり思想家であった。が、その前に、信州松代藩の禄を食む武家の人間—武士であった。佐久間家の歴史は、戦国時代以来、織田信長・武田信玄・豊臣秀吉などの諸将に仕えた名門の武家とされるが⁴⁾、嗣子なき故に、御家の断絶や減禄、そして再興を幾度も繰り返してきた悲運の家系であった。浪々の身にあった象山より3代前の曾祖父・佐久間三左衛門国品は、信州松代藩第4代藩主の真田信弘（1671-1737）に仕官して信州佐久間家を再興して家禄百石を賜り、「佐久間家中興の祖」となった。信州松代藩における佐久間家の始祖である。その後も、佐久間家は、嗣子なき故に絶家と再興を経て、象山の祖父に当たる佐久間彦兵衛国正の時代に、念願の御家再興が叶ったのである。しかし、家禄

は減録されて五両五人扶持（約十五石）という下級武士であった。

だが、国正も嗣子たる男子に恵まれなかった。その結果、御家断絶を免れるべく、苦肉の策として同じ松代藩士・長谷川千助善員の次男を養子に迎えて佐久間一学国善（1753-1832）とし佐久間家の家督を継がせた。この一学国善こそが佐久間象山の実父である。なお、一学から家督相続を受けた象山は、五両五人扶持を継承したが、天保14年（1843）11月、象山の顕著な活躍が認められ宿願であった曾祖父時代の百石に復禄することができた。

父母から、叙上のような佐久間家の悲運の歴史を聞かされて育った象山は、人一倍、御家の存続・発展には執着心が強く、それ故に彼は、晩年に恥を忍んで妾の周旋を知人に依頼したのである。その執念たるや凄まじく、その願いは54歳を迎え京都で斬殺される直前まで続いた。嗣子誕生による佐久間家の御家安泰は、非常の時代にあって非常の人生を貫いた象山の、武士道を生きる存在の根源（アイデンティティー；identity）であり、八面六臂の活躍をした彼の超人的な奮闘努力の源泉でもあった。

令和の今、象山の没後160年近くの歳月が過ぎた。その間、象山の妾問題の解明に挑んだ本格的な研究は全くなかった。一部の歴史学者たちは、著書や論文の中で、全集などの基礎史料を充分に吟味もせず、生理的次元で象山を嫌悪して、彼の好色性を指摘し、研究者とは思えない下品な表現をもって鋭く批判してきたのである⁵⁾。

そのような研究状況の中にあって、以下の本稿は、悲運の佐久間家を継承して武士道を生きた天下一等の学者であり思想家であった象山が、嗣子たるべき男子の誕生を妾に切願して、必死に佐久間家の存続を図ろうとした具体的な意図と経緯を、象山に関係する基本史料の詳細な分析を基にして、しかも象山自身の目線での内面的理解を図ることを研究課題とし、同時に象山を分析事例として近世江戸時代における妾制度の歴史的な実態や意味をも具体的に闡明することを意図している。すなわち、①象山没後の幕末維新时期から昭和の戦前・戦後を通じて、象山の妾問題がどのように理解され取り上げられてきたのか—先行研究の検討、②他人に妾の周旋を依頼した象山の本心とはいかなるものであったのか—妾の存在を不可欠とする近世社会の家制度の問題、③幕末維新时期における妾の現実的な在り方の実際を、象山と重なる時代を生き、象山に倍する多くの妾を自宅の内外に

抱えて生きた勝海舟や洪沢栄一の場合との比較分析を通して明らかにすること—妾の在り方の多様性、等々を、象山の場合を分析の中心事例として考察することを研究課題としている。

I、象山研究における妾問題の捉え方の歴史

昭和戦前の象山研究における妾の取り上げ方

佐久間象山といえば、幕末期という時代の転換期にあって革新的な発想と行動とで、時代の先駆者・先覚者として歴史的な偉人という評価を受けてきた人物である。だが、ただ一点、高名な学者である天下の象山が、公然と妾の斡旋を友人に依頼し、事実、妾を抱えて継嗣の誕生を切望し、歴史と伝統のある佐久間家の武門の存続を図ろうとした。この点が、彼の前近代的な封建性の側面として指摘あるいは批判されてきたのである。

象山没後に出版された伝記あるいは評伝の最初の作品は、門人の勝海舟校訂による象山著『省警録』の刊行と同じ明治4年(1871)に出版された斎藤謙著『佐久間象山』(東京隆文館)である。以後、清水義寿著『佐久間象山大志傳』(上下2冊、1882年)、林成文著『佐久間象山』(開進堂、1893年)、そして山路愛山著『佐久間象山』(東亜書房、1911年)と続き、様々に解釈された象山研究の書が時代の思想的影響を反映しながら現代にまで積み重ねられてきた。

そこでの特徴は、昭和戦前の伝記や評伝などの象山研究では、象山門人の生存者が存在したが故にか、あるいは妾の存在が明治以後も公認あるいは黙認されてきたが故にか、「妾」の問題に真正面から触れてはいないということである。例え触れても、偉人の逸話として肯定的な取りあげ方であった。その代表が、東京帝国大学医学部卒業の医学博士で象山研究の第一人者であった宮本仲(1856-1946)の学術的レベルでの本格的な伝記である『佐久間象山』(岩波書店、初版は1932年、増訂版は1940年)である。さらに、同じく地元信州の象山研究家であった大平喜間多(1889-1956)の『佐久間象山逸話集』(信濃毎日新聞社、1929年)である。この両者の著書は、昭和戦後の現代に至るまで、象山理解の必読書として歴史研究者その他の人々に長く活用されてきた。

宮本の場合は、郷土の偉人と敬仰する象山(祖父の算学門人)の威厳を損なわ

ぬよう十分に配慮して、象山は、嗣子の誕生を祖先から託された重大課題として幼少期より脳裏に焼き付けて育ち、栄えある佐久間家の家門の維持を最優先課題と信じて成人した、との理解である。それ故に、正室に嗣子の誕生を望めない状況の中で、「妾」を迎え入れた象山の女性観を、継嗣なき場合は家禄没収という江戸時代の武家の厳しい家制度のなせる技と理解して、「当時士大夫の家にありては妾を蓄ふるといふことは普通の事で別に珍しい事ではなかった⁶⁾」という歴史理解から、著書に「先生と其側室」という一節を設けて11頁もの紙幅を費やし、妾に関する詳細な象山史料の紹介と分析をおこなっている⁷⁾。象山の妾問題に関する最も信頼できる詳細な論述であり、以後、象山の妾に関する研究をする人は、宮本の同書を活用し、肝心の象山基本史料『象山全集』(全5巻)を繙く研究者は少なかった。

これに対して大平は、『佐久間象山逸話集』で、象山の妾問題について様々な角度から取り上げている⁸⁾。同書は、題名のごとくに、郷土の偉人である象山の「逸話」として「妾」の問題を真正面から取りあげ、象山が「妾」に嗣子の誕生を願った継嗣の問題というよりも、「英雄色を好むといふ譬に洩れず、先生もまた頗る女色を愛でられた⁹⁾」という基本的な象山理解から、象山の「妾」に関する数々のエピソードを小説風に興味深く記述している。

昭和戦前における、これら両者の対照的な象山の「妾」問題に関する見解は、昭和戦後の民主主義社会に日本が転換すると、宮本作品よりも、圧倒的に大平の逸話的な内容の象山の女性観の方が大きな影響を与え、歴史研究者でさえもが、象山といえば「妾の斡旋を知人に依頼した好色家」という否定的あるいは批判的な象山の女性観が形成され広まったのである。

なお、象山研究に生涯をかけた地元松代在住の歴史家であった大平は、『佐久間象山逸話集』の後に、象山伝記としては出色の『佐久間象山』(吉川弘文館、1959年)を刊行した。本書は、象山の生涯を克明に探究し偏りなく象山の生涯を描こうと心懸けた正統派の伝記で、宮本の伝記と双璧をなし、版を重ねて多くの日本人の“佐久間象山像の形成”に寄与してきた。こちらの伝記では、大平は、象山の妾の問題には全く触れず、海舟の妹の順子との婚姻の事実を簡潔に記すに留めている。

数ある象山伝記の中で特記すべきは、著名な評論家・歴史家であった山路愛山

(1865-1917) の作品である¹⁰⁾。同書は、いまだ『象山全集』が刊行されず¹¹⁾、象山史料が散逸していた明治の時代に、膨大な象山史料を蒐集して解読し、史料自身に象山の思想と行動を語るという手堅い手法で、極めて妥当な解釈と評価のなされた象山伝記である。同書は、A五判で274頁という本格的な伝記で、漢文を読み下して全文にルビを付して読者の利便性を図り、今なお読み返しても新鮮な魅力溢れる内容である。その山路の象山伝記には、象山の妾に関する話は一切、記載されておらず、順子との婚姻のことすらも記されていない。日本の幕末維新史の中で、象山がどのような歴史的な役割を担い責任をはたしたのか、象山の思想と行動の展開を基本史料に基づいて丹念に読み解く正攻法の伝記である。苦学力行して慶應義塾大学部教授となり天下一等の評論家となった山路のスケールの大きな歴史の人間の理解の、見事な仕方であり描き方である。象山の思想と行動の歴史的な展開と意義を政治史的な観点からみれば、山路にとって、象山の妾や妻子に関する問題は記すに値する問題ではなかったのかもしれない。

昭和戦後の象山研究における「妾」の問題の理解

だが、昭和の戦後に時代が変わると、象山の捉え方や叙述の仕方も変わった。例えば昭和戦後の歴史学者である奈良本辰也(1913-2001)は、昭和50年(1975)に『佐久間象山』という評伝を刊行している¹²⁾。その中で彼は、正妻と妾を同居させた象山に関して取り上げている。彼は、象山における妾の存在の問題を、当時の時代的な特殊性を勘案して正当に理解し、次のように論述している。

嘉永五年におこったいまひとつの大事件とは、勝海舟の妹順と結婚したことである。象山はこのとき四十二歳、順は十七歳であるから、年齢の差がさしてもんだいとならないこの時期でも、かなり珍しいほどのひらきようであった。

象山はこのときすでに、菊・蝶などの妾を持ち、四人の子どもを持っているが、正妻を迎えるのはこれがはじめてである。この縁談は象山の方からかなり熱心に所望したらしい。順本人を気に入ったこともあろうが、また勝海舟の妹であるということも、つねづね優生学を気にしている象山にとっては

大きな魅力だった。(中略) 佐久間家は不思議に子どもに恵まれなかった。とりわけ男子の育たない家系である。跡継ぎがないと家は断絶する。象山は幼いころからそのことを脳裏に刻みつけられて大きくなった¹³⁾。

上記の中で、「菊・蝶などの妾を持ち」と、「四人の子どもを持っている」の二ヶ所は、全くの事実誤認である。第一は、たしかに順子と結婚する前に2人の妾がいた。だが、順子を正室を迎える時点では、菊という妾は離縁して江戸の実家に戻り再婚しており、実在した妾はお蝶一人であった。また、2人の妾が生んだ子どもが四人いたと記しているが、順子を迎えるときには、その内の3人(2男1女)はすでに夭折して、5歳になる男児(菊が生んだ次男で嗣子となる恪二郎)だけであった。

しかも、嘉永5年(1852)という年は、黒船来航の前年であり、象山の西洋砲術を中心とする江戸木挽町5丁目の私塾が盛況を極め、幕臣や全国50余藩の藩士たち300人を越える門人がいた。そして、その内の幾人かは、塾舎兼自宅であった象山邸に住み込みの門人であった。それ故に、日常生活を支える勝手向きは多忙を極め、象山が「秋中余岐なき次第にて召使い一人暇遣し候所、何廉不都合¹⁴⁾」と弁明しているように、お菊が実家に戻った同年の秋以降は、家事その他の働き手として正室や使用人(妾)を求める根拠には十分な正統性が認められたのである。だが、叙上の諸点を奈良本は正確に理解してはいない。

また、京都大学文学部の哲学科出身の源了圓(1920-2020)も、同じ京都大学文学部の国史学科卒業の奈良本の象山伝記から15年後の平成2年(1990)に『佐久間象山』を出版する¹⁵⁾。京都学派の流れを汲む哲学科の出身である源は、梅原猛と同級の日本思想史研究者で、幕末期を代表する実学思想家の一人として象山思想を分析した。その中で彼は、象山の正室や妾の問題にも触れ、次のように内心の素朴な疑問を正直に表現している。

- ・象山の個人問題に移る。この年(嘉永五年;筆者注)の六月、二年前愛妾お蝶との間にできた三男淳三郎を失った。そしてこの年の十二月、四十二歳の象山は勝海舟の妹のまだ十七歳にしかなっていない順子と結婚した。象山がどのような心境でこの若い妻を迎えたか¹⁶⁾。

- ・順子はこの妻妾同居の家、おまけにいなくなった妾との間にできた子どものある家に、どのような心境で二十五歳も年の違う夫の許に嫁いできたのであろうか¹⁷⁾。

源の誠実な人間性を反映してか、彼は象山の思想と行動を、象山の内面の分析を踏まえて内在的に理解し、「生身の人間・佐久間象山」の全体像を描いた。それ故に、彼にとっては妾や妻子の問題も、象山理解の不可欠な事項であったのかも知れない。同書の中で彼は、象山と25歳も年の差のある女性と結婚したこと、しかも相手の女性が17歳という若さであったこと、に同情し疑問を呈している。

たしかに、源が象山伝記を執筆した20世紀の平成日本における結婚観からみれば、象山夫妻の年齢差も正室の若年性も、芸能人の世界や再婚・再々婚などの場合を除いて、常識的な結婚感覚からみれば理解を超えており、いまだ10代の若き新婦に同情を寄せたくもなる。実は、年齢差に関しては、象山自身が、婚姻の話しが出た当初から世間の風評を気にかけ、古代中国における年齢差の大きな婚姻をした学者の事例をあげて、次のように弁明している。いかにも中国の歴史に詳しい漢学者の象山らしいことであるが、この点の史料を、源は見落としている。

但、年の程余り相違にて人の警笑しじょうを引き可申候へども、晋の鐘繇しやうよう（古代三国時代の魏の書家）なども、晩年若き正室を得候例も有之候へば、貧著も御座有間敷、当年十七と申事に候。御一笑可被成下候¹⁸⁾。

江戸時代の婚姻における女性の年齢が10代であることは、全く一般的な常識であり当然のことで、疑問を挟む余地のない事柄であった。江戸時代には、20歳を過ぎると婚期の遅れた女性の表現として「年増としま」という言葉があり、武家の女性の結婚適齢期は10代半ばから遅くても25歳、一般女性の場合は16歳から17歳が結婚適齢期とみられていた¹⁹⁾。源には、このような江戸幕末期の婚姻に関する歴史の実態の視座から、花嫁となる順子が若年であることや年齢差に関する歴史的理解が求められてしかるべきであった。

その点、源や奈良本の象山理解の疑問に答えるがごとく、日本の政治思想史研究を精力的に展開した松本健一（1946-2014）は、象山の妾問題に関しても、日

本政治思想史の視座から基本となる象山史料を丹念に読み込んで大人の歴史理解を示し、次のように述べている。数ある象山の妾に関する見解のなかでは、最も妥当なものとしてよいであろう。

象山はこの阿玉ヶ池時代、お菊とお蝶という二人の愛妾を持っていた。これは女色のためではない。象山は、徳川時代の武家のつねとして、家を立てることをきわめて大事に考えていた。武家にあっては、男子が生まれなければ家名は断絶の可能性が高くなる。それに、象山は、じぶんの「非常の才」を誇りにしていたから、どうしてもその才を子孫に残したいという、異常なほどの情熱をもっていたのである²⁰⁾。

「蓄妾」する象山の前近代性を徹底的に批判

上記の奈良本辰也や源了圓における象山の妾問題に関する疑問は、あくまでも象山の思想と行動の全体的な理解の上になされたもので、全く悪意のない誠実な象山理解である。両者の見解を踏まえて、当時の歴史的慣行に即した象山の妾問題の妥当な見解を示したのが、象山に関する基本史料を徹底して踏まえて考察する研究者の松本健一であったのである。

だが、彼らの基本史料に基づく誠実な象山理解とは全く視点を異にして、象山の儒学や洋学の学問、および両者を統合した「東洋道徳・西洋芸術」という象山思想の全体像を批判し否定するという基本的な視座から、象山の妾問題に関しても「蓄妾」(妾を囲っておくこと)という表現を用いて、象山の思想的な前近代性を厳しく指摘し批判する歴史学者がいた。その筆頭は、前にも少し触れた、近世洋学史研究を専門とする佐藤昌介(1918-1997、東北大学名誉教授)である。佐藤は、日本における洋学受容の問題を、幕府による渡辺崋山や高野長英などの洋学者を弾圧した事件「蛮社の獄」の再吟味や西洋砲術・西洋兵学を中心とする幕末期の洋学成立史研究に従事し、『洋学史研究序説』(岩波書店、1964年)・『洋学史の研究』(中央公論社、1980年)・『洋学史論考』(思文閣出版、1993年)など、史料の分析や考察には問題なしとは言えないが、評価に値する研究書を残した研究者であった。

その彼が、上記の研究書において、幕末期の儒学者で洋学研究に活躍した佐久

間象山を研究対象に取り上げるのは当然のことであった。だが、彼は、その取り上げる問題意識の在り方、象山史料の分析と解釈の仕方、そして結論としての幕末洋学史上における象山の評価、等々、明治以来の象山研究の成果を、厳しく批判し否定する強烈な個性の研究者であった。

特に象山に関しては、従来の先覚者や先駆者の偉人という解釈や評価を覆し、徹底的に象山の人格批判を展開した。「砲術を易理（易学）によって説明しようとして、蘭学者の失笑をかった話は有名」²¹⁾な人物であり、これこそが「(象山の)『東洋道徳・西洋芸術』的思想の限界を余すところなく伝えている」²²⁾というように、極めてネガティブな象山認識から、象山の学問と人格を次のように様々な下劣な言葉を用いて批判している。

「一見『開明的』と思われる思想や蘭学観も彼の蘭学研究の成果と結びつけて解釈しないかぎり、かれの大言壮語癖に足をすくわれる」²³⁾「読めもしない蘭書を字書さえあれば読めると、と偽って記した」²⁴⁾「ぬけぬけと放言」²⁵⁾「象山の大言壮語癖が、ここまでのれば嫌味を超えて無邪気というよりほかかない」²⁶⁾「原書主義も、所詮はかれの大言壮語癖、ないし自己顕示欲の表れ」²⁷⁾「砲術家象山がついに馬脚をあらわした」²⁸⁾「厚顔で自己顕示欲のはなはだしい象山」²⁹⁾「かれの大言壮語癖は、塾居時代においても変わりはしなかった」³⁰⁾「大袈裟なものいい」³¹⁾「自信過剰、ないしは誇大妄想というほかかない」³²⁾「象山の大言壮語癖、自己顕示欲、あるいは誇大妄想的な性格に注意」³³⁾「『東洋道徳・西洋芸術』とは、このような確信ないしは錯覚に基づく学問観」³⁴⁾「象山は儒者にありがちな口舌の徒にすぎなかった」³⁵⁾「象山の無責任きまわる大言壮語式の放言」³⁶⁾「かれの蘭学は、西洋のそれとは異なり、幕末維新の激動期に狂い咲いた徒花にすぎない」³⁷⁾「象山の内部に巣食う前近代的な道学的欺瞞性」³⁸⁾

佐藤の著書には象山を批判し否定する下劣な表現は数え切れない。以上のような洋学史研究者の佐藤を信奉する数学者の川尻信夫(1924-、東海大学名誉教授)も、敬仰する佐藤の幕末史理解を継承して、丸山真男(1914-1996)・源了圓(1921-2020)・植手通有(1931-2011)などの象山研究の成果を鋭く批判している³⁹⁾。

それ故に、川尻の象山批判は、次のように大学の研究者とは思えない下劣な表現の数々を忠実に継承して、自らの「博士学位論文」(立教大学)の研究書で、象山の学問と人格を批判しているのである。

「象山一流の誇張癖」⁴⁰⁾「宣伝癖のあった象山」⁴¹⁾「負けまいとするための牽強付会」⁴²⁾「彼の数学とは算術計算に他ならなかった」⁴³⁾「象山の自己弁護、自己宣伝のためのペダンチック牽強付会」⁴⁴⁾「象山は詳証学に対する傾倒を、このような巧妙な語呂合わせ—自分だけで喜んでいたのであろうか—によって表現」⁴⁵⁾「象山が和算をある程度は知っていたことがわかる。(中略)彼は算術計算しかできなかった」⁴⁶⁾「象山の数学的・科学的知識にいつての評価は、拡大された虚像」⁴⁷⁾「彼の学問全体の性格やその学問観は再検討されなければならないが、それには、当然、彼の全体としての人間像まで問題にしなければならず」⁴⁸⁾

等々、象山史料の解釈の全てにおいて、象山の学問と人格を批判する極めて下劣な言葉が並び立てられている。特に自らの専門である数学に関しては、象山が「詳証術は万学の基本」(『省警録』)と、数学が西洋の自然科学全体の基礎的学問であると述べた一文を捉えて、川尻は、象山は「数学はすべての自然科学の基礎であるといえるだけの数学や物理学の知識はなかった」⁴⁹⁾「この文は彼自身の地道な研究に基いた信念ではなく、単なる受け売りにすぎない」⁵⁰⁾とまで辛辣に批判している。

叙上のような下劣な表現で象山の学問と人格を批判し否定する佐藤・川尻の両者の著書は、とても権威ある博士学位論文を授与された学術研究書とは言えず、実に疎ましく忌まわしい表現の連続であり、研究者としてみると辟易する。

その佐藤が、『洋学史の研究』の第三章「佐久間象山と蘭学」の「むすび」で5頁も費やして象山の妾問題を取り上げ、前近代的な妾問題という観点から徹底的に象山の人格を攻撃をするのである。

象山は幕末の知識人としては、めずらしいほど、血統を重んじた。象山はこれを誇りとし、嘉永五年(一八五二)十二月に勝海舟の妹順子を正妻にむ

かえる以前から、血統を残すという名目で、妾を蓄えていた。妾の数は明かではないが、弘化から嘉永年間にかけて、すくなくとも妾が二人いたことは事実のようである⁵¹⁾。

たしかに海舟の妹順子と結婚する前、象山には2人の妾（召使い）がいたことは事実である。だが、「すくなくとも」という表現は誤解を与える。合計で2名であるが、両者は在住期間に重なりはあるが、重ならない別々の期間もあった。したがって、1人のときと2人のときがあったのである。在宅期間の全てが重ならなかった事実の裏には、後に詳述するように妾の側に複雑な事情があったのである。

実は、象山には正妻を迎える前に妾を持つに至った経緯があった。象山は、天保10年（1837）6月、29歳で江戸神田の阿玉ヶ池に漢学（朱子学）の私塾「象山書院」を開く。その多忙な最中、翌年には結婚の話しがあった。しかし、これが藩当局の理解が得られず破談となってしまふ。それ以降、私塾の入門者は予想以上に増え、下宿生も抱えることになる。そこで初めて、多忙な家事その他を任せる「召使い」（女性）を雇い入れ、やがて彼女を妾としたのである。一部の象山史料を見て、「妾を蓄えていた」「すくなくとも妾が二人いたことは事実のようである」という、佐藤の推量に基づく誤解の断定的な表現は、事実の確認と根拠に基づく歴史研究の上では実に問題の表現である。また、佐藤は、「蓄妾^{ちくしょう}」という批判的文脈で使われる下品な言葉を使って象山を批判しているが、妾は蓄えておく物ではない。実際の妾の数や正妻を迎える前後における、佐藤の妾の実数の捉え方には基本的な誤りがある。『象山全集』に収められた基本史料を読めば分かることである。

また、晩年の象山が、江戸在住の17年間に藩費から書籍代や私塾の開設資金、蘭日辞書の編集刊行費など、多額の資金援助を受けたことへの感謝を想起し、塾居生活が7年目に入った万延元年（1860、象山50歳）、家老の恩田頼母宛の書簡に、次のように記している。

江府に寓居候事十七年に御座候。然る所、遂に一度妓楼に遊び候事これ無く候。有用の為に戴き候お手充に候へば、私の娯楽に聊かにても費し候は勿

体なしと覚悟仕候⁵²⁾。

この象山の表現に偽りはない。探究心が旺盛で実理有用の学問の躬行実践と人材育成の教育活動、それに各種の文筆活動に、睡眠時間を削り、昼夜、全力を傾注していた壮年期の象山のこの一文に偽りはない。天人合一の思想を奉じて、自尊と自戒を基本とする厳しい武士道を生きて学問に励んでいた象山にとって、酒席で遊興に耽る余裕などはなかった。毎夜のごとく、手まめに認めたと思われる象山の1300通を超える膨大な書簡、様々な文稿や漢詩文の執筆、あるいは『砲卦』『砲学図編』などの著書や依頼原稿など数々の執筆活動に追われ、膨大な『象山全集』(全5巻)の中に一度として宴会や酒席に興じたという表現はみられない。真面目で堅物の象山が、獄中で執筆した『省警録』の中で、研究者の長期的な実践の心得を、「内には心志を定め、外には血気を運らし、昼には飲食を節し、夜には睡眠を少なくす。修養の妙訣は果たして多子(多くの条件)なし⁵³⁾と記している。

しかし佐藤は、上記の象山書簡の一文を、次のように生理的次元で象山の人格を否定するような先入観を持って史料の意味を曲解し、象山の人格批判に転化しているのである。

いかにも道学者らしい発想に基づく釈明である。しかし江戸在住十七年間に一度も妓楼で遊んだことがないかどうかはともかくとして、一人ならいざしらず複数の蓄妾に要する費用は、果たして公私のいずれに分類されるのか。それにまた二人ないしそれ以上も蓄妾している以上、ことさら妓楼で遊ぶ必要がなかった、という皮肉な見方ができないわけではない。現に象山の蓄妾が、かれが強調するように、かならずしも血統維持だけを目的としたものではなかった…⁵⁴⁾。

正妻を迎える前は、2人の妾(召使い)が大勢の門下生を抱えた象山の私塾や家庭の食事その他の多忙な家事を分担していた。武家の場合は妻妾同居が原則で、あくまでも妾は使用人であり、後述する渋沢栄一のように豪農豪商が別宅を与えて囲い込んだわけではなかった。ところが、前述のごとく、2人いた妾(使用人)

の内の1人が暇乞いをして実家に帰ってしまったのである。塾舎兼住居の佐久間家の多忙な家事は不自由をきたした。そこで象山は、母親の助言もあり、妾ではなく正妻を迎えるという決断をし、それによって家事全般を正妻のお順と「召使い」(妾)のお蝶の2人体制に戻したのである。

さらに象山は、文久2年(1862)に塾居放免となった後、幕命を受け、決死の覚悟で上洛する。54歳のときである。上洛して1ヶ月後の元治元年(1864)4月11日、お順やお蝶を預けてきた信州松代の姉宛の書簡に、京都在留が長くなると考えた象山は、身の回りの世話役として信州から妾のお蝶を呼び寄せたいが、物騒な京都では無理なことである故、京都で新たに使用人(妾)を探したことを報告している⁵⁵⁾。

そして紹介された女性が「大納言政愛(政親の誤字)町三条実愛の愛妾の妹」であること、背が高く品があること、琴もお茶もお花もでき、裁縫も達者であること、等々を記して、信州にいる妾のお蝶に伝えたのである⁵⁶⁾。

だが、この書簡もまた、佐藤にかかると、次のような象山批判の証拠資料となり、人格否定をされることになる。

手ばなしで悦に入っている。象山が道学者の仮面をむいで、素顔をみせるのは、この書簡のこの記事が、全五巻のうち、三巻を占める、膨大な書簡の中で、ほとんど唯一のものといえる⁵⁷⁾。

そして佐藤は、彼の代表的な学術研究書である『洋学史の研究』の第3章「佐久間象山と蘭学」(244-247頁)で詳細に象山の妾問題を批判的に検討している。その結果、彼は、象山が妾を抱えたことは、「象山の内部に巢食う前近代的な、道学的欺瞞性」⁵⁸⁾であり、「かれの蘭学は、正統派のそれと異なり、幕末維新の激動期に狂い咲いた徒花にすぎない」⁵⁹⁾と結論づけるのである。研究次元での冷静で公平な批判のレベルを遙かに超えた象山の人格否定である。何故に佐藤は、これほどまでに、憎悪に満ちた象山史料の曲解をし分析をしたのであろうか。

たしかに歴史の史料は文脈の中で妥当性をもって公正に解読され理解されなければならない。だが、史料をどのように解釈するかという解読の仕方の可能性は、ある意味では無限である。ということは、「妾」の存在が公認されていた江戸社

会の時代性や家制度などの文脈において綴られる、「妾」の存在の時代的な妥当性を無視すれば、史料は如何様にも解釈できるということである—数理データを基本史料とする自然科学系の学問世界では起こりえないことは思うが。

フランスの博物学者ビュフォン（1707-1788）は、「文は人なり」と述べたが、研究者である前に人間としての佐藤や川尻の人格や品性—研究者でありうることの人間的な資格や条件を問わなければならない。

それにしても、丸山真男・植手通有の師弟、あるいは源了圓や松本健一など、心ある象山研究者たちは、研究者であることの矜持をもって象山史料を誠実に読み取り、自他共に納得できる妥当な解釈や評価を心懸けている。これに反して、佐藤や川尻などのように、「妾」の問題をもって象山の学問・思想・行動を封建的守旧性として全否定するような研究者は、日本の昭和戦後の学术界にはほとんどみあたらない。佐藤や川尻は、象山を変人奇人として扱うが、実は、そうする彼ら自身が変人奇人と呼ばれてしかるべきなのである。

象山研究で、佐藤や川尻から批判された丸山や植手は⁶⁰、象山研究において一切、妾問題には触れず、象山を純粹に政治思想史研究の対象として取り扱っている。また、佐藤や川尻の批判に対しても、彼らは反論も弁解も全くせず—相手にせず、自らの崇高な研究的人生を矜持として全うされた。研究者として、実に誠実に賢明な対応であった。

Ⅱ、明治の近代日本における妾の問題—森有礼の「妻妾論」

森有礼、『明六雑誌』に「妾」の存在否定の論文「妻妾論」を連載

以上、昭和の戦前・戦後における象山研究における妾理解の問題をみてきた。妾の問題は、明治以降の近代日本においても実態としては存在した。この問題を、日本で最初に公然と表沙汰にして論じて、日本社会の後進性を問題提起する契機となったのは、森有礼（1848-1889）の論文「妻妾論」であった。彼は、明治維新期に薩摩藩出身の学者的官僚として20代に日本初の学術団体「明六社」を結成して社長となり、30代にして伊藤博文内閣の初代文部大臣に就任、近代日本の学校教育全体の制度的基礎の確立に多大な貢献をした極めて進歩的な人物である。

欧米を模範とする彼の進歩性を形成した最初の海外渡航は、18歳の若輩で幕末

期の慶応元年(1865)、薩摩藩第一次英国留学生(英国に渡った19人の薩摩藩士)に選抜され、五代友厚(1836-1885)や寺島宗則(松木弘安、1832-1893)らと共に英国に密航して留学し、英国・ロシア・アメリカの各国を具に見聞してきたことである⁶¹⁾。この貴重な欧米体験が、その後の森の教育近代化を中心とする日本社会の制度改革の原点となったのである。

倒幕の知らせを受けて、明治元年(1868)6月に帰国。翌月の7月25日には、22歳(数え年、以下同様)の若さで新政府の高級官僚である外国官権判事に任じられ、さらに明治3年(1870)の秋には少弁務使(公使代理級の官僚)としてアメリカに赴任する。アメリカでの森は、アメリカを代表する各界の有識者たちに、今後の日本の教育の在り方についての意見を求め、それをまとめて明治6年(1873)にはアメリカで英書“Education in Japan”(『日本における教育』)を刊行した(前年の1872年にはワシントンで“Religious Freedom in Japan”(『日本における宗教の自由』)を発表した)⁶²⁾。

抜群の英語力で、自由自在にアメリカ人と交流し、欧米先進文化の中での豊かな生活経験を蓄積した森は、当時の日本における最も欧米文化、とりわけキリスト教精神に精通した進歩的な文化人であった。

明治6年(1873)7月にアメリカから帰国するやいなや、翌月の8月には啓蒙活動家の知友である西村茂樹(象山門人)に謀り、日本最初の欧米式の近代的啓蒙学術団体「明六社」を興す。創立当初の正式会員は10名で、「都下の名家」である加藤弘之(1836-1916、文部大丞、象山門人)・津田真道(1829-1903、陸軍大丞、象山門人)・西周(1829-1897、陸軍大丞)などの官僚学者、それに福澤諭吉(1835-1901、慶応義塾、象山遺児の後見人)・中村真直(1832-1891、同人社、象山親友)・箕作秋坪(1826-1886、洋学塾・三又学舎を開設)などであった。会員の人選を西村に任せた故にか、「明六社」の会員に占める象山の門人・知友が多く、最年少の森が初代社長に就任した⁶³⁾。

その森は、「明六社」の設立直後の明治8年(1875)2月、28歳のとき、「明六社」の会員である福澤諭吉を証人として、静岡県士族(旗本)の長女である広瀬常(阿常、19歳)と日本で最初の契約結婚をしたのである⁶⁴⁾。契約内容は、「それぞれが妻、夫であること」、「破棄しない限り互いに敬い愛すること」、「共有物については双方の同意なしに貸借売買しないこと」の三ヶ条からなる。その内容は、

夫婦がそれぞれに権利と義務を共有する男女同権を誓約するもので、まさに『明六雑誌』に彼が連載した妾制度を廃して一夫一婦制を唱える近代的な婚姻観の率先垂範であった。この森の米国式の近代的な結婚は、なおも妻妾同居を慣行とする旧態依然とした明治の近代日本社会を震撼させた。

結婚後の森は、英国に4年半滞在して帰国した明治18年(1885)12月には、それまでの太政官制度(慶應4、1868年)に代わって、新たに内閣制度が創設された(太政大臣、左右大臣、参議及び各省卿の職制を廃し、新たに内閣総理大臣並びに宮内、外務、内務、大蔵、陸軍、海軍、司法、文部、農商務及び通信の各大臣を置く)。初代総理大臣には参議・内務卿を歴任した伊藤博文(長州藩、1841-1909)が就任した。そして、当時、文部省御用掛であった有能な森が、第一次伊藤博文内閣の初代文部大臣に就任し、親しい先輩格の伊藤を支えることになる。

だが、その翌年の明治19年(1886)、何故にか森夫妻は結婚11年目、3児をもうけたが、双方合意の基に協議離婚をする。しかも、最初の婚姻届を役所に出した森は、離婚に際しても日本で初めての離婚届を役所に提出するのである。これまた日本社会では初めてのことで、社会の話題となった。

なお、離婚をした翌年の明治20年(1887)、森は、岩倉具視(1825-1883)の五女・岩倉寛子(1864-1943、旧久留米藩主で有馬家第14代当主の有馬頼万^{よりつむ}と離縁)と、再婚者同士で結婚する。だが、不幸にも急進的な西洋主義者として国粋主義者に狙われていた森は、明治22年(1889)2月11日の早朝、大日本帝国憲法発布の記念式典に出席するため大臣官邸を出たところで、旧長州藩士の国粋主義者・西野文太郎(1865-1889)に暗殺される。再出発した森の結婚生活は1年半で終わってしまった。享年43であった⁶⁵⁾。なお、残された後妻の寛子は、先妻の生んだ二児の母となり、自らも有禮の三男を生み育て、昭和18年(1943)11月、80歳の長寿を全うした。

『明六雑誌』に「妻妾論」を連載し婚姻制度の革新を主張

明治の近代日本を迎えたばかりの明治3年(1870)12月に制定された『新律綱領』(布告第九四四)では、妻と妾を同等の「二等親」と定めて旧慣を温存し、妾の存在が初めて法的に公認された。だが、この妾に関する法的条項は、明治13年(1880)7月の「太政官第三六号布告」(明治15年1月施行)において削除された。

以後、妾に関する法的な規定の復活はなかった。しかし、妾の存在は、法的な規定を超えて、明治の近代になっても消えることはなく、江戸時代以来の慣例である妻妾同居あるいは別宅囲い込みの実態はなくなり、政治家・事業家・豪農・豪商など地域や身分の相違を超えて広く存在した。

そのような実態として存続する前近代的な旧習である妾の問題を巡っての論文を、欧米経験の豊かな若き高級官僚の森有礼は、『明六雑誌』(明治7年5月刊の第8号から第10号、第15号、第20号、そして明治8年2月の第27号までの5回連載)に発表するのである。この森の論文の主旨は、日本の国家的発展の前提としての婚姻や夫婦関係の在り方を欧米社会と比較して問題とし、男尊女卑に基づく悪しき慣例の妾制度を廃止して、欧米キリスト教社会のような夫婦平等の一夫一婦制の婚姻制度に改革すべしとする革新的な婚姻観の主張であった。森の連載論文は、当時はまだ妾の公的な存在を認める法的規定もあり、江戸時代と変わらぬ旧態依然の実態にあった明治日本の文明開化の社会に、大きな衝撃を与え、様々な反響を呼んだ⁶⁶⁾。

流暢な英語力と欧米社会に多様な人脈を有する進歩的な国際人の森が公表した同論文は、欧米のキリスト教社会での豊かな生活経験をモデルとする近代社会の権利と義務からなる一夫一婦制を主張する内容であった。論文の冒頭で、彼は次のように夫婦関係の在り方を規定している。

夫婦の交は人倫の大本なり。(中略) 夫は扶助を妻に要するの義務を有し、また妻を支保する権利を有するの義務を負う。しかして妻は支保を夫に要するの権利を有し、また夫を扶助する義務を負う⁶⁷⁾。

ところで、森が提唱して結成した学術団体「明六社」の会員は、「定員」「通信員」「名誉員」「格外員」に分けられていたが、正会員である「定員」には、日本社会を代表する各界の重鎮十名が並んでいた。実は、前述のごとく、「定員」の中には象山門人の勝安芳(外務大丞、海軍大輔)、加藤弘之(洋書進講担当侍講)、津田真道(外務権大丞)、西村茂樹(文部大書記官)など半数近い四名がおり、また象山と親交のあった奥平昌邁(旧中津藩主)、中村正直(大蔵省翻訳局長)、福澤諭吉(慶應義塾創立者)、箕作秋坪(蕃書調所教授手伝)、箕作麟祥(和仏法

律学校初代校長) などがおり、明治の近代日本の各界における象山人脈の広さを実感させた⁶⁸⁾。

なお、象山の正室である順子の実兄の勝海舟も「明六社」の会員に選出されたが、彼には正妻の民子(1821-1905、江戸の薪炭商兼質屋の娘で深川芸者)の他に、公的に判明するだけでも5人の妾(増田糸・小西かね・梶久・香川豊・森田米子)がおり、武家である勝海舟の家も妻妾同居が基本であった⁶⁹⁾。特に「梶久(お久)」は、長崎伝習所時代の妾で、海舟34歳、梶久は14歳で20歳の年の差があり、女性はいまだ少女であった。また、海舟は、旧幕臣の娘である「清水豊(とよ)」も妾にした。だが、彼女が5女に当たる「妙子」を出産の後、暇を与えて香川家に嫁がせ、「香川豊」となって人生を再出発させたのである。正妻と多くの妾を持った海舟には、認知をした子どもだけでも、9人いたのである(4男5女、正妻の子が4人、妾の子が5人)。子沢山のお陰で、名門である勝家の血統は、現代にまで存続するのである。

海舟が多くの妾を持っていたことは、歴史上、ほとんど取り上げられず、全く問題ともならない。妾問題の対応に関して、恩師で義兄の象山などは、政略に長けた政治家である海舟の足下にも及ばなかった。だが、象山は正直者の学者であるが故に、何事も文章に書き留める習性があり、知人宛の妾周旋の依頼書をも書き遣してしまい、それが『象山全集』に収録されて一般に公開され、以来、現代に至るまで批判や中傷の対象とされてきたのである。

Ⅲ、象山における妾の存在意義一家の存続と生きる支え

歴史的存在である象山の妾問題に関する誤解と偏見

森有礼が論文「妻妾論」で論じた、明治日本の文明開化の時代における妾制度を廃止して、欧米モデルの一夫一婦制の近代的な婚姻制度に改革すべしという斬新な改革思想の視座からみれば、日本近代化の偉人と称せられる幕末期の佐久間象山は、たしかに小娘を正室に迎えたり、複数の妾を抱えるなど、封建的な好色一代男であった。森の目指した男女平等を基本とする婚姻制度の改革が実現した昭和戦後の日本において、なおも象山に関する誤解と偏見とに満ちた女性問題―「妾」の問題を取りあげ、それを日本近代化の先駆者と評される象山が内包する

封建的思想性として指摘する研究者が存在する⁷⁰⁾。

だが、森の改革論は、あくまでも明治の近代日本が向かうべき婚姻制度の改革課題を問題としたもので、遡って過去の家制度を基本とする江戸時代の嗣子を担保する御家存続の手立てとして、武家社会その他に存在した妾制度を批判し否定することが目的ではなかった。近代日本が目指すべき未来は創造できる。だが、いかに矛盾の多い過去であっても、それを消去することはできない。

だが、21世紀の現代日本における一夫一婦制の婚姻制度を基準として、象山没後160年近くを経た今日に、江戸時代の妾制度を批判し否定する歴史学者がいるのである。それは、現代を基準として過去を断罪する時代錯誤の歴史観である。実際に筆者が直面した体験談であるが、昭和51年（1976）の秋の学会で、いまだ二十代後半で大学院博士課程に在学中の筆者は、「日本近代化と佐久間象山―「東洋道徳・西洋芸術」の思想分析―」という論文を口頭発表した。初めての学界発表でとても緊張した。発表が終わると、突然、フロアから質問があり、「象山には妾がいたが、それでも近代的な思想家といえるのか」、との全く想定外の威圧的な質問を受けた。質問をしたのは日本大学の著名な教授であった。筆者は、武家を中心とする江戸社会には広範に妾制度が定着していた事例をあげて反駁した。以来、筆者の江戸社会における象山をはじめとする思想史研究で、「妾」の問題は筆者の歴史観の形成の重要課題として意識され、消えることはなかった。

紛う方なく、象山が生きた江戸時代には、家制度の存続に関わる側室（妾）制度は、天皇家や将軍家を頂点とする公家や武家の上流社会を超えて、広く日本の一般庶民の家社会にまで定着し認知された、半ば公的な慣例であった。そもそも日本の妾制度は、中国大陸や朝鮮半島に淵源をもつ古代以来の長い歴史を有する永続的な制度であり⁷¹⁾、日本の江戸時代の武家社会においても古代以来の妾制度の慣習を踏襲して、家門の継承と発展を図る不可欠な慣習として、妾（側室）の存在が嗣子の確保を図るためには絶対的な必要条件であった。嗣子がいなければ御家は断絶する。人間存在の全的基盤である家の存廃に関わる厳しい現実があったのである。だが、そのような歴史的現実が全く無視され、昭和戦後において家制度の束縛から解放され、個人を基本とする男女平等の民主主義の女性観・結婚観の視座から、幕末期とはいえ江戸時代を生きた象山が、妾を囲っていたという一断片を切り取って、彼が日本近代化にはたした歴史的貢献が批判され否定され

てきたのである。

象山が生きた江戸時代の実質的な一夫多妻制あるいは妻妾同居制であったときの問題を、反近代的な否定的出来事として取りあげ、それを封建的な思想的営為として安易に断罪することは、歴史的存在となった故人とその縁戚に連なって現存する人々の人権と名誉を侵害するものであり、事実に基づく歴史理解の欠如といわざるをえない。

研究者を含めた日本人の多くには、佐久間象山といえば、吉田松陰や橋本左内、坂本龍馬や小林虎三郎、加藤弘之や津田真道など、幕末維新期に活躍する数多の偉人たちを育んだ教育者、あるいは幕末期に開国進取を唱えて横浜開港や海外留学制度などを唱えた先駆的な思想家、さらには洋式大砲・電気医療器・地震計の製造、養豚・馬鈴薯・温泉発掘や各種鉱山の開発など、実に多種多様な殖産興業・富国強兵の実験的努力を重ねた科学者、等々として広く知られている。

だが、多くの場合、象山の人間性は、徹底した合理主義者で尊大不遜な自信過剰の理屈屋として否定的に評価されてきた。しかも、そうした象山否定の裏側には、彼の妾問題に対する生理的な嫌悪感が潜在していたことは確かである⁷²⁾。たしかに、象山が残した妾依頼の書簡史料の一部を抜き出し、それを表面的あるいは断片的に読めば、それを証拠に否定的な象山理解の人間像の一面を指摘することはできる。だが、もう一步立ち入って象山史料の全体に占める妾関係の史料を読み解き、史料を書いた裏側から素顔の象山の真意を汲み取れば、事実の見え方は全く異なってくる。実は、彼の遺した全5巻(A 5判で平均700頁という大著)の『象山全集』に収録された1300通を超える膨大かつ長文の書簡、長文の意見や建策などを記した文稿、漢文を基本とする漢詩や和歌などの作品群を精読すれば、象山が、いかに家族や他人(師匠・先輩・友人・知人・門人など)に対する慈愛や配慮に満ちた礼節の人間であったか、を理解することができるであろう。特に、象山が遺した母親・姉・妻・妾・友人知人の妻子・女性門人など、女性に関係する各種史料(書簡・漢詩・和歌)には、女性に対する差別や蔑視の意識や感覚など封建的女性観を感じさせる表現は全く認められない。フェミニスト(feminist)と表現しても過言ではないほど、女性に対する慈愛に満ちた象山の人間像を観取することができるであろう。

彼は、幕末期の尊皇攘夷運動が激化する中で、欧米人を「夷狄」(野蛮人)と呼

んで蔑視する当時の日本人の時代風潮を、同じ人間である西洋人に対する非礼な偏見であると戒めたごとく、男尊女卑の近世社会にあっても同じ人間である女性を蔑視する言動はみられない。事實は真逆である。彼は、例え女性であっても、能力主義による正統な評価をする人間であった。徹底した合理主義者であった象山は、男性に対すると同様に、女性の潜在的な能力の開花・向上に積極的な関心を抱き、その実現のための国家的な次元での教育改革を推進しようと努力した人物だったのである⁷³⁾。

実は、そうした象山の差別なき女性観の原点には、幼少期に自らが悩み苦しんだ封建的な女性観に抗い続けた下記のような革新的体験があったからである。

- ① 象山自身が妾（農民出身の召使い）の子であった。それ故に、藩の規定では生みの親といえども戸籍上は「召使い」の身分であり、女丈夫で良妻賢母の母親を、子である象山は、公然と「母」と呼べずに悩み苦しむ幼少期を過ごした。

その苦しい胸の内を、学業成績優秀で藩の表彰を受ける際に、初めて藩主に拝謁する機会を得た15歳のとき、第8代藩主で名君の誉れ高い真田幸貫（松平定信の次男で第8代將軍徳川吉宗の曾孫。後に象山の才能を見抜き、物心両面で最大の庇護者となる）に、身分が「召使い」（妾）であるために「母」と呼べないが、その女性を公然と「母」と呼びたいと直訴するのである。象山の純粋な孝心に深く感動した藩主は、象山の母親を「御見得格」（藩主に直接拝謁できる士分）とし、戸籍も父一学の「正妻」に改めさせたのである。この藩主の英断は、当時の一般的な身分制度や婚姻制度の現実を超えた異例の優遇措置であった⁷⁴⁾。

- ② 母親に似て女丈夫の実姉（^{けい}恵）は、弟の象山が「借しむべし御前様御婦人にて學術等のことは扱て置き、当時、時差向候御国家の事など本より、御心にかげられまじき事に候へば、御相談等も出来申さず、夫が平日残念」⁷⁵⁾と記すほど、文武両道に通じた男勝りの賢婦人で、常に近所の婦女子を集めて道徳や裁縫を教え、藩から賞賜を受ける象山自慢の理想的な女性であった。

その姉は、19歳で藩の侍医である北山林翁に嫁いだ。が、不幸して29歳のときに夫が他界し、寡婦となった。松代藩の「当主が幼少で無役の場合には、

扶持を半減⁷⁶⁾という規定により、経済的には困窮した。だが、遺された2男1女の養育に努め、近隣婦女子の教育にも尽力し、明治3年(1871)、63歳で没した。

それ故に象山は、寡婦となった姉を支え3人の甥や姪の子どものたちの教育を親身になって引き受けた。特に姪(「りう」)の結婚に際しては、伝統的な女性の生き方を継承しつつも革新性を交えた女性教訓書『女訓』を執筆して祝福したのである⁷⁷⁾。

- ③ 琴曲の女性門人である北澤伊勢子(1813-1886)は、側近の門人である北澤正誠の母である。彼女の琴曲に関する優れた潜在能力に着眼した象山は、さらなる琴曲能力を開発すべく、「当時の箏曲諸徒乱俗なればと新しき謡」の作譜を勧める。象山の期待に応じて、北澤は、いくつもの新作を作り、明治17年(1884)には東海10余県を吟行して自作を披露し、象山との約束をはたした⁷⁸⁾。

これらの他にも、蘭方医として認められ多くの臨床経験を有した象山は、正妻である順子の病気や親しい藩士の奥方の病気に対する献身的な治療の事例など、女性に関わる象山の様々な実体験が、偏見や蔑視なく、女性の能力や適性を評価し発揮させるべしとする象山の近代的な女性観の形成要因となっていたものとみられる。

さすれば、象山に「妾」が存在したことを批判する狭隘な象山理解の根幹は、膨大な象山史料の詳細な吟味の怠慢であり、幕末期という時代性に関する歴史認識を欠如した非歴史学の歴史学者、といわざるをえない。詮ずる所、歴史的な人物を評価する際の歪みや偏見は、研究者自身の全人的な人間性の欠如、あるいは歪曲の裏返し表現という根本問題に逢着するのである。

次に、象山の「妾」に関係する『象山全集』に収められた基本史料の数々を、象山という人間の全人的理解という視座から丹念に読み解いて分析し、象山に関する歪みのない妥当な女性観の実際を闡明にし、さらには象山の場合を問題分析の事例として近世日本社会における「妾」の問題の歴史的な理解や評価の在り方の妥当性に関する有無や可否を検証していきたい。

嗣子なき故に御家の断絶・減録・再興を繰り返した佐久間家

象山が自ら考証した『佐久間氏略譜』(天保5年作)など佐久間家に関する家譜史料によると、佐久間家は桓武天皇(737-806)の皇子である葛原親王(786-853)の孫の高望王(生没不明)の裔孫えいそんにあたる佐久間家村(生没不明、安房国佐久間荘に住居して佐久間氏を名乗った初代当主)が元祖であるとされる⁷⁹⁾。その家村から数えて14代後の佐久間盛次(織田信長の家臣で尾州犬山城主、正室は柴田勝家の姉)の4男の佐久間勝之(1568-1634、豊臣秀吉の家臣で信州長沼城主)の佐久間家も、その三代後の佐久間勝親(1669-1691)の代に至り、幕命により改易となり、やがて断絶する。

その勝之の家臣に岩間又兵衛清重(生没不明、四百石)という勇猛果敢な武将がいた。この清重が、勝之の兄の佐久間安政信州(1555-1627、飯山城主、三万石)の女婿となって佐久間家を継いだのである。しかし、その清重にも嫡男がなく、他家から養嗣子(鶴田清兵衛の子である与作清継)を迎えて佐久間家の存続を図った。その孫が、松代藩(信濃国松代藩の第4代藩主真田信弘、1671-1737)に仕えた佐久間三左衛門国品(家禄は百石)であり、これが象山に直結する信州松代藩佐久間家の先祖である。

しかし、その国品にも継嗣がなく、娘に同藩の林覚左衛門の子息(幾弥)を婿養子に迎えて佐久間家を継がせる。だが、幾弥にも嫡男がなく養嗣子に迎えた岩之進も夭折してしまい、またしても佐久間家は廃絶となる。しかしながら、藩当局は、国品の長年に亘る功績に報いるべく、国品の甥の村上彦九郎の子息である彦兵衛国正を養嗣子に迎えて佐久間家の再興を許し、五人扶持を給して後に五両五人扶持(約十五石)に加増した。

だが、その国正もまた継嗣たるべき男子に恵まれず、やむなく同藩の長谷川千助善員よしかずの次男である長谷川一学国善を養嗣子に迎えて御家の廃絶を免れる。実は、この国善の実子で嫡男が象山(佐久間修理啓)であった。

国善は、同藩の武家(相沢次郎右衛門)の娘を娶る。だが、故あって離縁となる。その後の国善は再婚せず、10数年の独身生活を経た文化2年(1805)、松代城外の農家の娘(荒井まん)を「召使い」(妾)として迎え入れた。そして、この両親の元に、文化8年(1811)2月、待望の嗣子が誕生した。象山である。父一学50歳、母まん31歳。親子ほども年の差のある両親の子であった。

叙上のごとく、佐久間家は、由緒ある武家の系譜に連なる家系とされるが、嗣子なき故に断絶と再興、減禄を繰り返す悲運の家系であった。その結果、象山の祖父の時代以来、佐久間家は五両五人扶持（約十五石）という低い家禄の下級武家に甘んじてきたのである。この佐久間家の辿った歴史を、象山は幼少の時から聞かされて成長し、象山の妾問題の核心となったのである。叙上のような言語を絶する佐久間家の悲運の歴史を抜きにしては、象山の妾問題を理解することはできない。なお、旧禄の百石への復禄は象山父子の悲願であったが、父親没後の天保14年（1843）11月、33歳を迎えた象山の数々の功績により、悲願成就、旧禄の百石に復することとなったのである。

最初の縁談の話と破談となった理由

天保11年（1840）の象山は、幼少期より学問一筋の生活に明け暮れてきたが故にか、いまだ「而立」(30歳)にして未婚であった。前年には、再度の江戸遊学を機に、江戸神田阿玉ヶ池（現在の東京都千代田区岩本町二丁目）に漢学—朱子学の私塾「象山書院」(五柳精舎)を開設したばかりであった。すでに漢詩人としてその名を天下に知られていた親友の梁川星巖（1789-1858）と香蘭（1804-1879）の夫妻が、神田阿玉ヶ池に漢詩塾（玉池吟社）を開いており、その彼の勧めで、象山は同地に私塾を開いたといわれる。

だが、何と同年の春には、早くも象山の名が、『江戸名家一覽』に掲載されたのである⁸⁰⁾。同書の「儒者」の部に記載された象山の氏名は、同書の9頁の下段の5人目（下段2人目には恩師の佐藤一斎が記載）に列記されており、他にも安積良斎（1791-1861、昌平坂学問所教授）、斎藤拙堂（1797-1865、津藩儒学者）、塩谷宕陰（1809-1867、幕府儒官）、藤田東湖（1806-1855、水戸藩儒学者）など、当時の日本の儒学界を代表する錚々たる儒学者の氏名が記載されていたのである。誠に晴れがましいことで、大願成就に喜んだ象山は、郷里の信州松代の恩師である鎌原桐山などに、この喜びを伝えた。

なお、この『江戸名家一覽』の現物の写真版を初めて公開したのは、この本稿である。これまでは同書が存在し、そこに象山の名前が記されていることは宮本仲・大平喜間多・奈良本辰也・源了圓・松本健一の各氏の佐久間象山の伝記や評伝に紹介されてきた。だが、この情報源は宮本仲であった。全ては宮本が昭和戦

「江戸名家一覧」に掲載された「佐久間象山」－「佐久間商山」



【九】頁の下段の右から5人目に「佐久間商山」の氏名が記載
(国文学史料館所蔵「星槎ラボラトリー眞山青果文庫」)

前に出版した本格的な『佐久間象山』の中の記述を引用されたものと思われる。

だが、初めて現物の写真版史料をみると、今までに誰の伝記・評伝にも記されてはなかった驚くべき事実が明らかとなった。その第一は、記載された象山の氏名が、何と「佐久間商山」であったことである。「象山」を「商山」と記す史料は初めてである。「象山」という号は、最初の江戸遊学から帰藩した天保7年(1836)のときより、自ら用いたものであった。だが、その読み方が、はたして「しょうざん」か「ぞうざん」かを巡って、昭和の戦後から今日まで長く論争が続いている。しかし、「商山」は「しょうざん」と読み、江戸時代は読み方が合えば、それに様々な漢字を充当させることが当然の社会であった。それ故に、「象山」を「商山」と書き、「しょうざん」と読ませる表記も当然にありえたのである。そう理解することができる。さすれば、「象山」は「ぞうざん」とは読まず、「しょうざん」と読むということになり、「しょうざん説」が正しいことを立証する決定的な史料となる。

その第二は、象山が、天下の大儒である恩師の佐藤一斎と同列に記されていたことである。象山は、天保4年(1833)11月、初めての江戸遊学で一斎門人となった。23歳のときである。2度目の江戸遊学が6年後の天保10年(1839)6月で、この時は師弟関係は継続してはいたものの、江戸の神田阿玉ヶ池に私塾、しかも

朱子学の私塾である「象山書院」を開設し、儒学者として独立するのである。朱子学の旗手たらしとする象山は、一斎の儒学を「陽朱陰王」と決めつけて決別し、文章詩賦の指導は受けるが儒学の指導は受けないと宣言したのである。

翌年の9月には念願であった、学者として最も敬仰する中国宋代の儒学者『邵康節先生文集』を編纂することができた。が、さらに、目出度いことが重なる。象山に婚儀の話があったのである。その話しは、象山の幼少時の恩師（算学・易学・天文学）である竹内錫命（1780-1871）と松代藩侍医で親友の立田玄迪（梅齋、1799-1870）の斡旋で、相手は松代藩医で象山の親友でもある渋谷秀軒（1791-1871）の長女であった（「先頃中子孝錫命両氏の勧めにて、渋谷氏の長女を聘し候つもりに内談は既に調ひ申候」⁸¹⁾）。この婚儀の話しを、象山が母親にすると大変喜んでくれたのである（「婚儀の儀も申上候所、御懸詞を蒙り多謝奉候」⁸²⁾）。

だが、友人に婚儀の日程を問われると、同11年（1840）12月9日付の松代藩の親友宛の返書には、この婚儀に対して藩庁から異議が入り、年内に婚儀を済ませ、新妻を佐久間家へ迎えるという、当初の予定は難しくなり、来春になるのではないかと、内心の心配を下記のように記している。

家母平安のよし仰下され有難安心仕候。婚儀の儀も申上候所、御懸詞を蒙り多謝奉候。内談は早く調ひしかども、又々政府（藩庁、筆者注、以下同様）の異議にて一体当年中に引取度心構に御座候ひしが、兎ても来春に相成候半に存奉候（已上復月十八日の御答）⁸³⁾。

象山の婚儀に対して松代藩庁から異議があり、婚礼を内定通り天保11年（1840）11月には挙行しがたく、日程の調整に難儀している、というのである。なぜ、藩庁は象山の結婚に異議を唱えたのか。考えうる反対の理由は、ただ一つ。象山が前年の天保10年2月から、再度、藩費公費の留学生として江戸に学問修業に出ている学徒であること、しかも江戸に到着した直後の同年6月には、勝手に神田阿玉ヶ池に私塾「象山書院」を開設し、遊学期限の2年で松代藩に戻る気配が全くない様子であること。藩庁からすれば、江戸遊学の期限が切れる翌12年3月には、遊学満期で松代に帰藩し、藩務に就くものと解釈していた。

だが、象山は、結婚しても江戸に留まり、江戸を舞台として存分に学術世界で

活躍したいとの強い考えであった。しかし、禄を食む以上は帰藩して藩の公務を全うしなければならない。この狭間で懊悩する象山が救いを求めたのは、婚姻の正式な仲介役を依頼した象山の理解者であり庇護者でもある松代藩上席家老の実力者・矢澤監物（1796-1841）であった。象山は、藩の重鎮である矢澤に藩当局を説得してもらい、結婚しても学都の江戸に居住できるよう取りはからってくれるように依頼したのである。

だが、不運にも、仲介役を務めてくれるはずの矢澤が、年明け直後の天保12年（1841）正月10日、江戸で急死してしまうのである。これによって、縁談について藩当局の反対が再燃し、「配偶の義も御深切に仰蒙候が、是も矢公（矢澤監物）物故の故に大にもつれ、迷惑仕候⁸⁴⁾と、象山自らが記す通り、結局は破談となってしまうのである。

だが、象山は、破談になったことよりも、慈父のような存在で庇護してくれてきた矢澤の死を心から悼み、「矢澤大夫意外の凶変にて大洋中にて船の舵を折候心地にて困り候⁸⁵⁾と深く嘆き悲しむ。結婚は矢澤亡き後に破談となっていたが、象山は、なおも江戸に残って学究活動を展開し、藩を超えた天下国家の問題に取り組んでいくことを決意するのである。

矢澤亡き後、象山の非凡な才能と果敢な行動力を高く評価し、物心両面で象山を庇護していくのは、松代藩第8代藩主の真田幸貫であった。象山は、遊学期限が切れるや否や、天保13年（1841）5月には「四書訓点」（儒学の主要教典「大学」「中庸」「論語」「孟子」の従来の訓点注釈の再検討）という藩命を受け、さらに同年9月には江戸藩邸学問所（江戸在住の藩士子弟の教育研究機関）の頭取に任じられ、その翌年の秋には藩主が老中に就任して海防掛となるや、「三十にして天下に繋わるることを知る⁸⁶⁾との心境で、象山は藩主の顧問役として天下国家のために江戸で活躍することになるのである。

江戸に残留し重要藩務を担い西洋砲術の教授活動を展開

学者として何としても江戸残留を切望して苦慮する象山に対して、前述のごとく、最大の庇護者である藩主真田幸貫の計らいによる救済措置が相次いで講じられる。藩当局は、翌年の天保12年（1841）5月には、「四書音訓正上木」、すなわち儒学教典である「四書」に新たな訓点を付した注釈書の作成という江戸での藩

務を、象山に課したのである。抜群の漢学力を誇る象山は、難なくこの任務を短期間でなし遂げると、同13年の9月、今度は江戸藩邸学問所頭取に任ぜられる。さらに、翌14年（1843）10月には、郡中横目役（藩領内監察役）に任じられると、松代に帰り藩の殖産興業を図るための藩内各村の現地調査と報告書の作成に奔走する。

そして次に、何よりも象山の学問や思想、否、生き方までをも根本から変革する重大責務を担わされることになる。すなわち、藩主の真田幸貫が幕府老中に就任し、海国日本の多難な沿岸防禦を担う海防掛を担当することになるのである。すると、幸貫は、早速、鬼才の象山を江戸に呼び戻して顧問役に任じ、隣国で勃発したアヘン戦争（1840-1842）の経緯を含めた西洋列強諸国の動向を調査し分析させる任務に当たさせた。象山は、蘭書の翻訳書や当時の名だたる江戸の蘭学者を通じて、覇権主義をもって東アジアに勢力東漸する西洋列強の情報を収集分析し、その結果を詳細な藩主宛の上書「感応公に上りて天下当今の要務を陳ず」⁸⁷⁾にまとめた。

その長文の上書の中には、西洋列強に対峙する日本の取るべき国家防衛のための有名な対応策「海防八策」が示されていた。この天保13年（1842）の「海防八策」は、黒船来航の11年も前のものであり、そこには欧米列強の異国船来航の予告と、それに対応する日本側の防衛政策が具体的に示されていた。この象山の「海防八策」が、その後の勝海舟や坂本龍馬など門人たちの海防政策の原形となったのである。

叙上のような象山の八面六臂の活躍に対して、藩主はその多大な功績を認め、天保14年（1843）11月、悲願であった五両五人扶持（約十五石）という少禄から曾祖父・佐久間三左衛門国品の時代からの旧禄であった佐久間家の家禄を百石に復するという功賞を与えたのである。

もっとも前述のごとく、佐藤昌介が「一人ならいざしらず複数の蓄妾に要する費用は、果たして公私のいずれに分類されるのか」⁸⁸⁾と、妾を抱える象山の経済面での問題を皮肉を込めて指摘しているが、象山のような武家の場合、藩の戸籍に記される妾の正式名称は「召使い」であり、あくまでも妻妾同居が原則で家事を分担する家族の一員であり、外に別宅を構えて生活を保障するわけではなかった。

それに象山の場合は、すでに天保10年には神田阿玉ヶ池に私塾を開いて収入(入学金に相当する「束脩」と授業料に当たる「謝儀」)があり、嘉永年間以降の西洋砲術を中心とする私塾には入門者が殺到し、私塾からの収入は莫大な金額であった。象山は、天保10年(1835)に開設した儒学の私塾「象山書院」の門人がいたが、嘉永元年(1848)には時代を反映して西洋砲術の門人も相次いで入門してきた。正式に西洋砲術教授の看板を掲げて教授活動を本格化するのには嘉永三年、松代藩下屋敷の深川藩邸においてであった。同年だけでも木村軍太郎(佐倉藩)、武田斐三郎(大洲藩)、山本覚馬(会津藩)、勝麟太郎(旗本)、岩文之進(市川一学、兵学者)、八木數馬(上田藩)など、幕末明治期の各界で活躍する入門者が123名も押しかけたのである(前年には31名、翌年には58の入門者)⁸⁹⁾。

個人で入門する以外に、福沢諭吉のいる中津藩(藩主は奥平大膳大夫)のように、藩主自ら象山に家臣全員の教育を依頼し、一藩挙げて象山の西洋真伝流砲術に転換する事例も出てくる。そのような西洋砲術教授の盛況ぶりを、象山は、「百石ばかりの士にて大名の重き頼を受け候」⁹⁰⁾と得意げに表現している。藩主依頼の藩邸への出張教授の場合、月額謝礼は高額であった。

したがって象山の私塾からの収入は、百石の家禄収入を超える莫大な金子で入り、経済的には全く問題がないことを、嘉永3年(1850)7月、信州で暮らす母親宛の書簡で次のように記している。

只今の勢にては砲術門人二三百人に相成候は遠からずと存じ申候。二三百人の門人御座候へば二季の謝儀ばかりにても百金(百両)にあまり申べく候へば、くらし方は夫のみにてもつき申べく、況や儒生並に西洋学の門人も之れ有り候事に候へば、其表にて医方など内職の様致し候よりははるかに姿もよろしく、第一に天下の益に相成候事に付、何分左様仕度存奉候⁹¹⁾。

西洋砲術の門人だけの謝儀(益暮年2回の授業料)でも百両を超える収入があり、その他に儒学や洋学の門人からの謝儀も入る。象山は、蘭方医学を学んで数々の臨床経験を積み、「日本近代医学の祖」といわれる緒方洪庵(1810-1863、幕府奥医師兼西洋医学所頭取)や伊東玄朴(1801-1871、幕府奥医師)など当時の蘭方医学の大家たちと交流のある医者でもあった。治療費を求めずに知人や門人の

治療や投薬をしていたが、頻繁に日本近海を往来する外国船が増加する嘉永年間以降、象山に時代が求めるのは医学ではなく、西洋砲術などの私塾教育であった。それは、天下国家の国益に繋がる有益な活動で生き甲斐もあり、収入面でも医者の内職などをする必要はないと、郷里の母親に自慢の書簡を送っているのである。

象山は、弘化元年（1844）から本格的に蘭学を学びはじめ、4年後の嘉永元年以後は、西洋砲術・西洋兵学などの軍事科学書の他にも医学・理化学・百科全書・殖産興業、等々に関する高価な蘭学原書を入手し、何としても洋学者として大成すべく、原書解読に不眠不休で挑んだ。だが、高額な書籍購入の費用は全て藩費で賄われており、百石取りの武士である象山は、その禄高に倍する収入が私塾から入り、経済的には全く不自由のない生活状況にあった。だが、藩には多大な出費をさせるが故に、象山を批判する勢力が存在したことは確かである。

叙上により、前述した佐藤昌介の「一人ならいざしらず複数の蓄妾に要する費用は、果たして公私のいずれに分類されるのか」と、妾（召使い）の費用の出所が藩公費の私用であるかのような想像だにしない下劣な指摘が、学術論文に書かれている。だが、前述のごとく、当時の象山の経済状況（収入状況）を精査すれば理解できることで、調査せずして推測し批判するのは研究者として礼を失する誠に怠慢な姿勢である。

破談後の江戸滞在と妾（使用人）の雇い入れ

松代藩医で親交のあった渋谷秀軒の長女との縁談が破談となった後の象山が、門人勝海舟の実妹である順子を正室に迎えるのは、嘉永5年（1852）12月のことである。最初の縁談が破談となってから10年余りも後のことであった。

その間の象山は、上述のごとく、松代藩江戸藩邸の学問所頭取、また藩主の真田幸貫が老中海防掛に就任するや、その顧問役となってアヘン戦争の経緯を含めた西洋事情の情報分析と日本の対外的な海防政策「海防八策」の策定、郡中横目役として松代藩財政の再建の殖産興業を図るための領内各村の各種資源の発掘調査、藩命による洋式野戦砲の鑄造と試演、嘉永元年（1848）からの西洋砲術教授の開始、特に同3年（1850）7月からは松代藩下屋敷である江戸深川藩邸で西洋砲術の公開教授を本格的に開始、翌年の嘉永4年（1851）5月には塾舎を江戸木挽町5丁目（現在の中央区銀座6丁目）に移し、幕臣や諸藩の藩士に対して本格

的に西洋砲術等を教授し多忙を極めた。

また、私的面では儒学の深化や洋学の修得を図って私塾を開き多様な門人を抱えたこと、さらに『増訂和蘭語彙』『邵康節先生文集』などの編纂と刊行、洋式大砲の製造に必要な構造や各種部品を原図のフィートやポンドの単位を日本の度量衡で図解した『砲学図編』の著述・刊行、そして極めつけは洋式大砲の原理と機能を東洋易理で解釈した自信作の『礮卦』^{（ほうけ）}を執筆したこと、等々、東西両洋の学問を躬行実践する格物窮理の実学者として、象山は人生の中で最も多忙を極め、天下一等の洋儒兼学の学者として有名を馳せ、面目躍如たる活躍の時期であった。

格物窮理の学問を現実問題の解決に向けてひたすらに躬行実践する実学者の象山は、「佐久間はいつ眠るか判らぬ」⁹²⁾といわれるほど、昼夜の別なく研究と実践に一意専心の生活を送り、後に「四十以後は、乃ち五世界に繋ることを知る」⁹³⁾と回顧している。四十代の象山は、儒学を基礎に洋学を探究して、東洋と西洋の半円を統合した全円の世界的視野から日本を捉え、祖国日本の独立安寧の実現という国家的大目的に向かって八面六臂の活動を展開する。

このように実理有用な学問（実学）の理論と実践を多面的に展開する象山の精力的な学究活動を支えたのは、弘化年間に私塾や自宅の勝手向きを委ねてきた使用人（妾）の存在であった。栄誉ある武門の系譜に連なる佐久間家の存続発展の重要性を、幼少時から語り継がれて脳裏に印刻されて育った象山にとって、30歳を過ぎてからの最も重要な私的課題は立派な嗣子を残し、家名を存続させることであった。

その結果、象山は、最初の縁談が破談になった後の弘化年間に、「召使い」（使用人）として素性の立派な2人の女性（お蝶とお菊）を相次いで、江戸の塾舎に連なる自邸に迎えることになる。やがて象山は、この2人の使用人が女性として成長すると、妾として嗣子の誕生を託した。それに応えて彼女たちは、下記の4名（3男1女）の子どもを生むのである。

出産年月	象山年齢	妾(母)	子の性別・名前	誕生後の状況
①弘化2年(1845) 5月	35歳	お蝶	長女 菖蒲	同年(1845)11月夭折
②弘化3年(1846) 7月	37歳	お蝶	長男 恭太郎	同年(1846)9月夭折
③嘉永元年(1848) 11月	38歳	お菊	次男 恪二郎	明治10年(1877)2月、松山にて中毒死
④嘉永3年(1850) 11月	42歳	お蝶	三男 惇三郎	嘉永5年(1852)夭折

上記のごとく、象山は、三十代後半から四十代初めの、当時としては晩年に、三男一女に恵まれる。だが、男子の誕生が待たれたが、最初に生まれたのは、弘化2年(1845)5月、お蝶の産んだ女兒であった。しかし、この女兒の誕生で初めて父親となった象山は、大変に喜び、菖蒲月の5月に生まれたので「菖蒲」と名づけて心から愛した。江戸に私塾を構えて蘭学に没頭していて、地元松代に戻らぬ象山に批判的な藩当局を意識してか、象山は、庇護者である藩老宛に「賤妾義去月二十日に分娩、女子出生仕候。母子共甚健かにて肥立天幸の事に御座候」⁹⁴と、女兒誕生の喜びの書簡を送り、なおも江戸に留まる旨を報告する。

その後、象山は、3男1女に恵まれる。だが、不幸にして、その内の2男1女は相次いで夭折し、次男の恪二郎だけが残って成人する。しかも、その恪二郎は、象山からみれば、武門の当主としては資質や人格に欠ける男子で、内心、心許なく穏やかではなかった。

事実、象山没後の恪二郎は、叔父の勝海舟、義母の順子や育ての親のお蝶、それに数多の象山門人たちから、物心両面での支援を受けながらも、10代末から20代にかけては放蕩三昧の青春を送る。そして最終的には、福澤諭吉の慶応義塾に入学し、象山門人で司法省幹部の幹旋で、司法省判事に任ぜられる。だが、任地の松山裁判所に勤務中の明治10年(1877)2月、中毒死してしまう。結局、象山が最も恐れていたことが的中し、佐久間家の存続はかなわず、御家断絶となるのである。

Ⅳ、門人海舟の妹の順子との結婚—結婚年齢と年齢格差

勝海舟の妹の順子を正室に迎える頃の象山の活動状況

象山は、嘉永元年（1848）から西洋砲術（西洋兵学を含む西洋軍事科学、以下同様）の教授活動を江戸深川（現在の江東区永代1丁目）の松代藩下屋敷で始め、身分や藩を問わず入門者が年を追って急増する。そこで象山は、藩の資金援助を受けて同4年（1851）5月には、江戸木挽町（現在の中央区銀座6丁目）に私塾兼私邸（地主は旗本の浦上四九三郎）を構え、老母などの一家全員を信州から呼び寄せる。

此度外宅御手充百参拾金戴き候て、木挽町五丁目御絵師の狩野殿向へ家を求め引き移り候。畳の数八十枚ばかりにて蔵も二ツ有之、大小銃習はせ候空地も少々有之、都合も宜しく偏に上の御特恩と難有仕合奉存候⁹⁵⁾。

象山の私塾の向い隣には、後に象山門人となり日本画壇の大家となる狩野芳崖（1828-1888）が学ぶ木挽町狩野家の画塾があった。管見の限りでは、芳崖が象山の門人であることを記した象山研究書はみあたらない。象山と芳崖との出会いは、同画塾の出身で、当時、画塾生に指導助言をする同塾の顧問役を務めていた江戸在住の松代藩御用絵師の三村晴山（1799-1858）の仲介であった⁹⁶⁾。三村は、象山と親交が深く、この三村の紹介で象山は芳崖と出会うのである⁹⁷⁾。

木挽町に西洋砲術を中心とする軍事科学系の洋学私塾を開設した当時の象山は、40代の半ばで、蘭学原書を解読して最新の西洋知識を獲得した希少な軍事科学系の洋学者として、全国にその名を轟かせ、旗本・御家人の幕臣や50を超える全国諸藩の家臣たちが相次いで入門していた。象山が、旗本の門人・勝海舟の実妹である順子を正室に迎える嘉永5年（1852）の前後における私塾は、江戸藩邸からの通塾生で賑わっていたが、寄宿の入門者も幾人かいた。まさに、黒船来航前夜の象山塾は異常な程に入門者が殺到し、封建制度の根幹である「藩」（幕藩体制）の壁を越えて、塾生たちが学术交流や情報交換をし合う、活気に溢れた最盛期の状態にあった。

順子を正室に迎える嘉永5年(1852)は、黒船来航の前年であった。この年には、加藤土代士(弘之、仙石藩)・河井継之助(長岡藩)・小林虎三郎(長岡藩)・三島億二郎(長岡藩)、大槻禮助(仙台藩)・内山隆佐(大野藩)など20数名が入門し、前年の嘉永4年(1851)には西村平太郎(茂樹、佐倉藩)・吉田大次郎(松陰、長州藩)・大島万兵衛(出石藩)など50数名が入門していた。さらに、翌年の黒船が来航する嘉永6年(1853)には伴鐵太郎(旗本)・坂本龍馬(土佐藩)など150名近くが入門して、象山塾は400名を超える多数の門人を擁する全国屈指の私塾に成長していた⁹⁸⁾。

したがって、象山の多忙さは異常を極めた。が、それを支える奥向きもまた、住み込み門人もおり、食事その他の日常生活の準備に、火の車の忙しさであった。当時、木挽町に構えた象山の私塾兼住居の勝手を切り盛りしていたのは、召使い身分の妾であるお蝶とお菊であった。召使いとして佐久間家に雇われたのは、お菊が天保13年(1842)で16歳のとき、その彼女より2年遅れでお蝶が弘化元年(1844)で13歳のときであった。したがって雇われたのはお菊が2年早い先輩で、年齢もお菊の方が5歳ほど年長であった。

お蝶は2男1女(長女の菖蒲、長男の恭太郎と3男の淳三郎)を生み、お菊も次男の恪二郎を出産した。だが、順子を正室を迎えるときには、お蝶の生んだ2男1女は全て夭折し、お菊の生んだ5歳になる恪二郎だけが残っていた。佐久間家の家名の存続を何よりも願う象山にとって、嗣子が頼りない次男の恪二郎1人になってしまったことは全く心許ないことで、佐久間家の将来を思うとき非常に不安を隠しきれなかった。加えて、異常な盛況をみせる私塾の切り盛りにも女手を欠き、まさに象山塾の勝手向きも人手不足で多忙を極めていたのである。

お蝶が3男の惇三郎を生んだ翌月の嘉永3年(1850)の12月、象山は、江戸から信州松代に住むお蝶とお菊に宛てて、次のような書簡を送る。そこには、いつもながらの兩人に対する象山の優しい心遣いが滲んでいた。

十一月十二日づけのきくの文、今日、届き申候。いづ方にてとゞこほり候や、ふしんに存候。先々、恪(次男の恪二郎)も惇(三男の惇三郎)も手前共兩人(お蝶とお菊)も彌たっしやとの事、何よりに存候。申越し候品、歸りの節しつねんなく持参可申候。此間申遣し候通つれ候もの多ぜいに候間、

其心得にて用意専一に候。手前ども、ひさしぶりにて逢候事に候間、かみなどゆひ居り可申候（後略）⁹⁹⁾

2人とも、江戸の商家に生まれて教養のある女性でリテラシー能力にも優れていた。が、象山は、漢字の少ない仮名交じりの優しい文体で、子どもや2人の女性（妾）の安否を気遣い、帰省の折には頼まれた江戸の土産の品々を忘れずに買い求めて帰参するとの優しい気配りを示し、また大勢の門人を連れて帰省することになるので受け入れ準備を万端なく準備しておくこと、久しぶりに会うので髪結いなどにも行き綺麗にして出迎えてほしい、との願いの書簡であった。

海舟の入門後に妹を見初めて正室に

ところで、正室となる順子の実兄である海舟が、初めて象山を訪問して面談するのは弘化元年（1844）、22歳のときとされる¹⁰⁰⁾。海舟が蘭学を学ぶ大分、前のことであるが、天保10年（1839）、当時、29歳の象山は、神田阿玉ヶ池に念願の朱子学の私塾を開いていた。だが、その後、突然にアヘン戦争の情報が舞い込む。古代以来の日本の政治的文化的な宗主国であった大国の清朝中国が、数艘の軍艦に敗北を喫し、厳しい内容の不平等条約を結ばされたのである。

象山は、この出来ごとを契機に一念発起し、蘭学を本格的に学びはじめる。文法書を終えてからは、オランダ百科全書『ショメール』（“Chomel, Noel”；『日用百科辞典（*Dictionnaire Oeconomique*）』に記載されたガラス、電気治療器、地震計など様々な西洋の品々を次々と製造して実験し、蘭書に記載された西洋科学の精密性・優秀性を確認しようと奮闘努力していた時期であった。

実際に海舟が象山塾に入門するのは、それから6年後の嘉永3年（1850）7月のことであった¹⁰¹⁾。そのときの象山は、神田阿玉ヶ池の朱子学の私塾を、儒学、洋学、そして需要の高まる西洋砲術・西洋兵学を教授する私塾に拡大刷新し、松代藩下屋敷に西洋砲術教授の看板を掲げて教授活動を始めた年で、塾舎を木挽町に独立移転する前年のことであった。

海舟が入門した嘉永3年には、本島藤大夫（佐賀藩）・木村軍太郎（佐倉藩）・高島五郎（徳島藩）・武田斐三郎（大洲藩）・山本覚馬（会津藩）・岡見彦三（中津藩）・津田真一郎（真道、津山藩）・八木数馬（上田藩）など¹⁰²⁾、幕末明治

期に活躍する錚々たる人物が入門していた。

海舟の入門を象山が記した最初の史料は、嘉永3年7月26日付の「母親宛書簡」であった。そこには、「先年中野代官つとめられ候小谷彦四郎殿の孫麟太郎と申人なども致入門候」¹⁰³⁾と、幕臣旗本の入門を殊の外、喜ぶ記載がなされていた。さらに翌日の松代藩門人宛の書簡にも、海舟の入門を、「旗下の士にも追々迂拙の唱へ候所信じ候て入門候もの之有候。小谷燕斎翁の孫なども入門の頼い之有候」¹⁰⁴⁾と、全国諸藩の藩士ばかりか、直参旗本までもが入門する天下一等の有名私塾に発展した喜びを伝えている。

多くの門人の中でも取り分け優秀な海舟は、象山、自慢の門人であった（「麟太郎と申人一昨年以來洋銃の門下に御座候処、漢学も可也に間に合候程にて劍術などもよく遣ひ諸侯方の内にも門人御座候」¹⁰⁵⁾と、海舟は、象山塾に入門するときには、すでに漢学・洋学・蘭学に通じ、劍術も島田流の免許皆伝で、蘭学の方も私塾を開いて門人を抱えるほどの学力であったという。その海舟の妹の順子と象山との出会いが、はたして海舟の紹介であったかどうか、その具体的な経緯は明かではない。

肝心の順子を正室に迎える話しが象山史料に登場するのは、海舟が象山塾に入門して2年後、嘉永5年（1852）11月15日付の松代藩の知人宛書簡であった（「勝麟太郎殿妹妻にもらひ申度、内約束取極め申し候」¹⁰⁶⁾）。

次が同月27日の松代藩の友人宛書簡と¹⁰⁷⁾、同日付で出された象山の理解者である松代藩家老の恩田頼母宛の書簡である¹⁰⁸⁾。これら3通の書簡の内でも最も詳細な記述は、象山の庇護者である家老の恩田頼母宛の書簡で、そこには次のように正室を迎える話しが記されていた。

小生義も当秋中召使一人仔細有之暇遣し候処、其以來無人にて家事不都合に付、此度は母も勧め候に付、正室の相応なるを求め候処、門人ども、色々世話仕候も有之候処、意にかな懐ひ候者無之候ひしに、近日に至り風と一人有之、早速取極め候義に御座候¹⁰⁹⁾。

黒船来航の前年、すなわち嘉永5年（1852）の秋に、2人いた「召使」(妾)の1人（お菊）が故あって暇乞いをして実家に戻った。その結果、多くの門人を抱

える象山の家庭は家事万端、女手不足で非常に不都合な状況に陥った。そこで、母親の勧めもあり正室を迎えることにした。そのとき、運良く正妻にしたい女性（海舟の妹）との出会いがあり、早速、婚儀の段取りを進めることになった、ということである。

松代藩の「藩日記」にも、「十一月二十三日」の日付で「其方儀、勝麟太郎様御妹縁組仕度旨、願之通被仰付」¹¹⁰⁾との記録がある。江戸で主君の側近として活躍する今度の象山の婚儀願については、藩庁には全く問題なく婚姻は願いの通り、すぐに受理された。

実は、順序が逆になるが、順子との婚姻が決まる直前の嘉永5年（1852）2月、妾のお菊は、後述するように、故あって恪二郎を残して佐久間家を出て、江戸の実家に戻ってしまう。その後の彼女は、旗本で幕府御殿医の高木常庵（250石）の後妻となって1男1女を儲け、江戸で何不自由ない生活を送ることになる。

そこで象山は、母親の勧めもあり正室を迎えることにした。門人たちも色々で紹介してくれるが、中々、意にかなう女性はいなかった。そのとき、運良く正妻とすべき理想の女性との出会いがあった。海舟の妹の順子である。思いをつのらせた象山は、早速、婚儀の段取りを進めることになった。順子本人を見初めたのはもちろんであるが、それ以上に、順子が旗本・勝海舟の妹であることに惹かれたのである。立派な子どもを産める氏育ち（家柄や身分、教養や嗜み）の良さを重視する象山の理想的女性像の条件を、順子は満たしていたのである。大名と同格の直参旗本である勝家における順子の生育状況を、象山は、藩での理解者である家老の恩田頼母に、次のように報告している。

御直参に勝麟太郎と申人有之、其妹に御座候。この勝は小谷燕齋翁の甥にて荊婦（妻の謙遜語、愚妻）に相成候も其姪にて御座候。（中略）当時小普請（無役の旗本・御家人）には候へども一と料見御座候人にて、小生門人中指を屈し候内の人に御座候。其母と申人も頗る気概のある女性にて手跡（筆跡）など男まさり達者なる事に御座候¹¹¹⁾。

順子の母親は、娘を正室に迎えたいと熱心に求婚する象山が、息子・海舟の恩師で高名な学者であることなど、海舟を通して象山の人物を理解していた。また、

「五歳に成り候小兒に年致し候召使なども有之候」¹¹²⁾と、5歳の小兒（次男の恪二郎）と召使い（妾のお蝶）がいることなど、象山の家庭状況をも全て理解した上で、「少女をもらひ候はゞ遣し候はんと申事と存候」¹¹³⁾と、正室に迎えたい順子の母親が婚姻を認めてくれていることを記している。順子を見初めた象山は、婚儀の段取りを「早速に取極め」¹¹⁴⁾、「引取り候は来月十五日と相約し申候」¹¹⁵⁾と報告している。

25歳も年の差のある象山の結婚

なお、先に紹介した源了圓『佐久間象山』では、象山と順子との年齢差が25歳と、親子ほどの開きがあることを不思議に思い、問題として殊更に指摘している。だが、この程度の男女の年齢差は当時の結婚の慣習では全く問題のないことであった。しかしながら、このことを、さすがの象山自身も気にしており、世間の風評を案じていた。それ故に漢学者で博識な象山は、中国の古事「鐘繇」^{しょうよう}（151-230、晋の書家で政治家、晩年に29歳も若い正室を迎えた逸話）の事例を取り上げて、夫婦間に大きな年齢差のある結婚は特別に驚くことではないと弁明している。

さらに、もう一つのハードルは正室となる女性が17歳と若いこと、このことに関しても中国の古事を紹介して弁明している。しかし、この点に関しては、象山は、殊更に弁解しようと思わず、どうぞ御一笑くださいと、恥じらうように突き放し、次のように述べている。

年の程余り相違にて人の訾笑（^{しししょう}嘲笑、そしり笑い）を引き可申候へども、晋の鐘繇なども晩年若き正室を得候例も有之候へば、人の貧著も御座候有間敷、当年十七と申事に候。御一笑可被下候¹¹⁶⁾。

合理主義者で堅物の学者と思われている象山は、何事にかぎらず自己の思想と行動には正統性のあることを主張し、反論や弁解、あるいは自慢の弁を展開する。この度の結婚に関しても、相手方との年齢差や若年性に関して、中国古事まで引用して弁解している。好きだから結婚したい、結婚は学問ではない故、それだけで、後付けの理論は必要ないのである。

ところが象山は、さらに自らの結婚観を披瀝するのである。男女の結婚で大切なことは、男女の年齢差や女性の若年性ではなく、日常生活での「性行」(人間性と普段の行い)が大切であり、これが悪ければどうしようもない。その「性行」とは、「了見(料見)ある家庭」で育てられるもので、年が若いということは全く問題ではない。そう述べるのである。

旗本の家庭で立派な母親や兄の下で育った順子を見初めた象山は、年齢差などを超越した男の一途な恋心を恥じらう故にか、予想される世間の風評に対して、次のように得意の防衛理論を展開しているのである

六ヶしく候へば一も二も無之…少し料見ある母兄に育てられ候者に候はゞ一向の俗婦にも有之まじく、左候へばけく年のわかきも面白かるべくと存じ候¹¹⁷⁾。

象山の一途な思いが叶って、海舟の妹の順子を正室に迎える手続きは、嘉永5年の「十一月二十三日に願の通被仰付難有仕合奉候」¹¹⁸⁾と藩当局で問題なく受理された。正室として順子を佐久間家に迎える婚儀の日程も、「引取り候は来月十五日と相約し申候」¹¹⁹⁾と決められたのである。年若い順子を見初めた象山は、順子本人の魅力も去ることながら、直参旗本である勝海舟とその母親のいる武家の家庭で養育された、気丈で賢明な女性であることに非常な満足感を抱いていた。

なお、順子との婚儀が執り行われた嘉永5年12月、象山は、すでに蘭学塾「氷解塾」を開いて蘭学研究に励んでいた勝麟太郎に、海国日本の防衛が如何に重要であるかを説き、「海舟書屋」という扁額を記念に贈り¹²⁰⁾、海国日本の海軍研究に精励すべきことを推奨した¹²¹⁾。「海舟勝麟太郎」(明治以降は「安芳」)、すなわち「勝海舟」の誕生である。

正室を迎える前に妾が存在

幼くして神童と評され将来の大成を囑望された象山は、父親や藩内諸師に就いて文武両道の基礎を修め、早くから天下一等の朱子学者をめざした。念願叶って藩費で江戸遊学中の天保五年(1834)、いまだ正妻も妾も持たずに、刻苦勉強する青年学徒であった。そのとき、象山は、佐久間家に関する諸史料を考証して佐

久間家先祖の系譜を闡明する「佐久間氏略譜」を執筆する。そのときに、自尊と自信に満ちていた象山は、嗣子なき故に御家の断絶と再興を繰り返し、祖父の代から五両五人扶持（約十五石）という下級武家に没落した佐久間家の悲運の歴史を改めて思い知り、屈辱と無念の思いに駆られたことはいまでもない。

以来、文武の才に恵まれた象山は、身分を超えて活躍でき評価される学問の道を志し、ひたすらに刻苦勉励して天下一等の学者をめざし、佐久間家の存続と発展を願い求めた。それ故に婚姻関係でも、自分の優秀な才能を受け継ぐ嗣子の誕生を切望した。その象山に最初の結婚の話があったのは、前述のごとく、再度の江戸遊学で神田御玉ヶ池に漢学塾「象山書院」を開設した翌年の天保11年(1840)、30歳のときであった。親交ある藩医の渋谷竹栖（修軒）の長女との縁組みが内定したのである。だが、この縁談は、婚姻の許可を巡って藩当局と対立する。問題の解決を願って婚姻の仲介役を依頼したのは、象山の庇護者で家老の矢澤監物（松代藩筆頭家老）であった。しかし、その直後に、頼みとする矢澤が急死して、破談となってしまう。

これ以後の象山は、後に「三十にして天下に繋わることに在るを知る」（『省管録』）と述べたごとく、藩主や家老などの厚い庇護を受けて、多忙な研究活動を精力的に展開し、さらには洋学の修得による西洋砲術・西洋兵学などを教授する軍事科学系の洋学私塾を開設するなど、人生で最も多忙を極める時期であった。そして、最初の縁談から10数年が過ぎた嘉永5年（1852）12月、象山は、25歳も年下の女性である門人勝海舟の妹（順子、お順、当時17歳）を正室に迎えるのである。このとき象山42歳、晩婚であった。

だが、そのとき、象山には「お菊」「お蝶」という2人の「召使い」（妾）がいた。が、お菊の方は、故あって江戸の実家に戻り、実際に同居していた「召使い」（妾）はお蝶一人であった。彼女たちは3男1女を生んだが、不幸にも次男の恪二郎のみの生き残り、あとの3人は相次いで夭折してしまった。象山は、幼い我が子との死別に際して悲嘆にくれ、特に長男の恭太郎が夭折したときには、次のような惜別の和歌を残している。この世に生まれて間もなく、春の「沫雪（あわゆき）」のごとくに、解けて消えた愛おしい我が子を思う、1人の父親である象山の切なく悲しい心情が読み取れる名歌である。

象山の妻妾一覧

正妻	お順 (順子)		<ul style="list-style-type: none"> ・旗本で門人の勝麟太郎の実妹「順子」と嘉永5年12月に婚姻(順子17歳、象山42歳、年齢差25歳)。 ・実子はなかったが、妾腹お菊の生んだ恪二郎を、お菊の離縁後も我が子のごとくに最期まで愛育し、佐久間家の維持に、実兄である海舟の支援を得て尽力した。 ・象山の死後、勝家に戻り、名を「瑞枝」と改め、明治41年(1908)に病没、享年73。法名は「慈海院殿妙香日順大姉」。
妾(女中)	お蝶 (蝶子)	履歴 人柄 出産 最期	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸芝西久保鯉節間屋田中安兵衛の娘、天保2年(1831年)の生まれ。象山より20歳年下。 ・象山が神田阿玉ヶ池に私塾を開いていた弘化元年(1844)、13歳で「小間使い」として奉公。 ・容姿端麗で、三味線も達者で文章能力にも優れる。気質は温順にして誠実な性格、正室のお順と共に、妾のお菊の生んだ次男で嗣子となった恪二郎を養育して佐久間家を守り、象山の最期まで「妾」として内助の功を尽くした。象山没後も、恪二郎を実子のごとく慈しんで育てた。 ・弘化2年(1854)5月、長女の菖蒲を、江戸の神田阿玉ヶ池の私塾寓居にて出生。同年11月に夭折。 ・弘化3年(1846)7月、長男の恭太郎が誕生。信州松代の御使者屋の寓居にて出生。だが、病気に罹り同年9月に夭折。 ・嘉永3年(1850)11月、3男の淳三郎が信州松代の御使者屋の寓居にて誕生。だが、嘉永5年6月に病死。 ・象山没後も佐久間家の再興に尽力、お菊の生んだ恪二郎の母親代わりとなり、その恪二郎が他界した後の明治37年(1904)5月、晩年を過ごした東京市芝区浜松町で病死、享年73。
妾(女中)	お菊 (菊子)	経歴 人柄 出産 離縁再婚	<ul style="list-style-type: none"> ・天保13年(1842)5月、江戸浅草蔵前札差の和泉屋近藤九兵衛の長女(16歳)を迎える ・容姿端麗で「蔵前小町」と呼ばれた。裁縫や針仕事など婦人としての嗜み(「糸竹の道」)を修得し、三味線や和歌・茶道にも精通した教養ある女性。 ・嘉永元年(1847)11月、信州佐久間家で次男の恪二郎を出産 ・嘉永5年(1852)9月、故あって離縁して佐久間家を辞し江戸の実家に帰り、後に旗本で幕府御殿医の

		最 期 佐久間家 に残した 次男の恪 二郎	<p>高木常庵（250石）の後妻となって1男1女を儲け、何不自由ない生活を送る（佐久間家に残した実子の恪二郎は、正妻の順子と妾の蝶子が我が子のように慈しんで養育し、象山他界の後も最期まで面倒をみた）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明治40年（1907）10月17日に天寿を全うす。享年80。 ・佐久間家に残した実子の恪二郎は嗣子として成長するが、象山亡き後は、慶応義塾を卒業して明治6年（1873）司法省に出仕となり愛媛県判事となる。 ・明治10年（1877）2月、判事として任地先の伊予松山にて食中毒で急死、享年29。正妻の静枝に男児（継述）がいたが病死、また、妾に女児（小松）がいたといわれるが真偽の程はわからない¹²³）。 ・象山斬殺と同時に佐久間家は家禄没収・御家断絶。 ・明治2年（1869）2月、特別の恩典をもって恪二郎を給人に取立られ佐久間家の家名再興。 ・だが、明治10年（1877）2月に嗣子の恪二郎が他界し、佐久間家は家名廃絶。
京都 妾(女中)	おます	経 歴 趣 味 奉公履歴	<p><small>おおぎまろ</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・正親町三條様（大納言）の側室の妹。京都上洛後の妾（「性もよろしく琴なども出来申候」「せいの高き女にてひんのよろしき方」「ぬひはりも何なり間を合せ申すべく」「名家の血筋の残り候」¹²⁴）。 ・琴、京うた、三味線が得意で「ひんのよきものに候」¹²⁵）。 ・京都上洛後、刺殺に至るまでの極めて短期間の妾。
京都 妾(女中)	おゆき	経 歴 趣 味 奉公予定	<ul style="list-style-type: none"> ・京都の公家唐橋家の身内（水島家門）の娘で「名家の血脈の残り候」¹²⁶）。 ・琴・京歌・三味線が得意¹²⁷）。 ・京都上洛後における妾の予定者であった。が、象山の突然の死で、実際に妾となり同居した形跡は認められない。
→象山斬殺：元治元年（1864）7月11日、享年54。法号は「清光院仁啓守心居士」。			

（増訂版『象山全集』の各巻に所収の關係する書簡、宮本伸『佐久間象山』、大平喜間多『佐久間象山逸話集』その他を参考にして筆者が作成）

つもりしと 見しはきのふの 夢にして たちまち消ゆる はるの沫雪^{あわゆき}¹²²⁾

後に蟄居放免となり幕命を受けて上洛した折り、信州松代に残してきた妾のお蝶に対して、京都で妾を持つことを後ろめたく思う象山は、「手前の事、わすれ候の外に致し候と申心さらさらになく候へばこそ、これくらいのくはしき事も、つゝまず申遣す事に候」¹²⁸⁾と、長文の文を書き、弁解し気遣っている。このお蝶宛の書簡は、象山が斬殺される1ヶ月前に書かれたものであった。

海外密航事件に連座し捕縛直前の佐久間家

象山が、安政元年(1854)4月6日、門人吉田松陰の海外密航事件に連座して、幕府の江戸町奉行所に召喚されて尋問を受け、そのまま獄舎に収容される。奉行所には、取調に必要な身上調書が松代藩御側御用人の津田^{うたた} 転(150石)から提出された¹²⁹⁾。その調書には、44歳のときの象山が、安政元年、江戸木挽町で西洋砲術を主体とする私塾を開設していた当時の佐久間家七名の家族構成が次のように記されていた。

同人母八十歳、同人妻十九歳、同人悴妾腹恪二郎七歳、召使女一人二十五歳、下女一人三十三歳、下男一人五十四歳¹³⁰⁾。

そこで「召使女一人二十五歳」とは愛妾「お蝶」のことである。このとき、すでに「お菊」は江戸の実家に戻って不在であり、また「下女一人三十三歳」とは、妾ではなく正に家事を担う「下女」を指すものと思われる。

なお、私塾兼住居であった当時の佐久間家(私塾と住居は別棟)には、上記の家族の他に、私塾に住み込み門人の山田兵衛(1831-1897、幼年より松代藩門人の山田定則、飯田中学校教員、次男が三井圓二郎で象山研究者で増訂『象山全集』全5巻の編纂者)、蟻川賢之助(直方、1831-1891、松代藩士、吉田松陰・小林虎三郎に次ぐ象門の高弟、松代藩鉄砲奉行、幕府講武所砲銃教授並)、北山安世(象山の甥)、安世の実弟の北山藤三郎、加州浪人上田捨蔵、それに18歳の少年の子安鐵五郎(峻、1836-1870、大垣藩、後に本野盛亨、柴田昌吉らと共に横浜弁天町に活版印刷所・日就社を設立。明治6年には柴田と共著『附音・挿図 英和字

策』を発行。同7年には日就社より『読売新聞』を創刊。象山晩年の側近の門人)などが住居していた(実は大垣藩士の住み込み門人は4名いたが、象山の逮捕と共に子安以外の3名は帰藩した¹³¹⁾)。

お菊が離別して江戸の実家に戻った真相

なお、象山にとって二人目の妾は、「蔵前小町」と評判の美人「お菊」のことであった。天保13年(1842)5月に16歳で象山に召使いとして雇傭された。それから6年後の嘉永元年(1848)11月、22歳になったお菊は、次男の恪二郎を出産する。だが、その子が5歳になる嘉永5年(1852)2月、彼女は、我が子を残して江戸の実家に戻ってしまい、後に旗本で幕府御殿医の高木常庵(250石)の後妻に収まるのである。

一体、何故に我が子を残して象山と離別して実家に戻ったのか。その理由を説明している象山の伝記や評伝は全くなく、不詳とされてきた謎の一つである。だが、丹念に『象山全集』に収められた書簡史料を読み込むと、この問題を解く鍵が判明する。彼女は、すでに出産前から佐久間家になじめず、実家に戻りたいという強い意向を示していた。象山との不仲であったわけではない。その本当の理由を、実は次の象山史料で知ることができる。

御煩はし申度事御座候。其義は、昨冬出産候めしつかひの事に御座候が、従来氣質に尖なる所之有候故、子を生じ候はゞ面白きものも出来候はんと申より、午年帰藩の砌も再び召抱へ、此地(信州松代)へも召具し候事に御座候。然る所此ものゝ継父と申すもの至て性合よろしからぬものにて、頻に金を貧りたがり、昨年も暇もらひ度とて此方へ参り候所、妊娠の廉を以て断り候所、当年は是非ともとて申候故、先昨年は兎も角もと申、少しの手充いたし返し候¹³²⁾。

お菊は、江戸浅草の蔵前札差の和泉屋近藤九兵衛の長女ということで、この書簡が出る前には継父の存在は象山史料には全く記されていない。だが、実は母の前夫で養父に相当すると思われる人物が存在していて、妾になった主人の象山

宅のお菊の所にお金を無心にきていたということである。この話しは象山自身が上記のように記録している故に、ありうることである。養父が訪ねてきてお金を無心されることは、お菊にとっては非常に迷惑なことで、主人の象山に顔向けのできないことでもあった。それ故に彼女は、幼子の恪二郎を残して象山のもとを去り、実家に戻る覚悟をし実行した、ということである。

実は、この問題に対して象山は非常に困惑し、何とかして愛するお菊を自分の許に留め置きたいとの強い気持ちを、次のように仲介役を頼んだ義弟の雨宮左京に述べている。

既に已に望み候所の子を得候事に付、当人をば帰し候ても無之と申もの候所、第一当人出産之後、小児を見、又追々大きく成り候て日々あいらしく成候を見候ては、何分帰り度無之、是非とも其事、自身（象山）よりも可申候へども拙者よりも貴兄（象山の義弟である雨宮左京に説得役を依頼）を御頼申候。（中略）拙者に相従ひ少しく道理をも弁へ、また其上に小児も出来候へば始終此方に身をかため申度志と被存候¹³³⁾。

お菊も、妊娠して男児を出産し、我が子が成長して愛らしさを増していけば、その子を残して実家に帰るとは思わないであろう。象山は、そう考えた。しかしお菊は、我が子と共に佐久間家に止まりたいが、迷惑がかかるので象山の思いを振り切り、我が子を残して実家に戻ってしまった。

暇乞いをした愛妾お菊との別離に際して、象山は、愛別離苦の悲しい胸の内を、「めしつかひし女の きさらぎのはじめに いとまをこひければやるとて」と題して、

かりがねの おなじこゝろに さくらばな さくをもまたで いなむとやする
春ごとに かりも別れぞ をしまるゝ あきさへたてば きぬるものから

という心中を吐露した惜別の和歌を数首詠み、嘆き悲しんでい¹³⁴⁾。そこには、傲慢不遜・自信過剰で徹底した合理主義者と批判される天下の大学者である象山の勇姿はなく、愛する女性との別れを悲しむ純情な男心を正直に表現した和歌で

あった。このような、1人の男としての心情を吐露する愛別離苦の歌を詠むことも、決して象山自身にとっては特別な作為ではなく、偽りのない自然な象山の実像の一面を表現するものであった。

生涯を象山一筋に尽くしたお蝶

なお、もう1人の妾であるお蝶であるが、お菊とは対照的な女性であった。13歳で小間使いとして象山の家に仕えた少女時代から73歳で他界するまでの60年もの長い間、彼女は生涯を象山とお菊が生んだ嫡男格二郎の養育に献身的に尽くして生きた女性であった。

再度の江戸遊学を許された象山は、天保10年(1839)年6月、29歳で江戸神田の阿玉ヶ池に最初の私塾を開いた。以来、『邵康節先生文集』の編纂(1840)、藩命である『四書』の訓点作業(1841)、老中海防掛に就任した藩主真田幸貫の顧問役としての西洋事情の調査分析と日本の対応策(海防八策)の上書執筆(1841)、藩の殖産興業を担う郡中横目役としての現地調査の職務遂行(1842)、蘭語修得と蘭学原書の解説研究(1842)、等々、象山の公私に亘る激務の生活は、女手がなく、住み込み門人も同居しており、多忙を極める生活状況にあったことは想像に難くない。

私塾を開いてから4年が過ぎた弘化元年(1844)、ついに象山は1人の少女を「小間使い」として雇い入れる。江戸の芝西久保で鯉節問屋を営む商家の娘で、名は「蝶」(お蝶)、まだ13歳の幼い少女であった。以来、彼女が、多くの門人を抱える象山の勝手向きを一身に担った。が、やがて彼女は、妾となって象山の子どもを3人、出産する。最初が、弘化2年(1845)5月に16歳で出産した長女の菖蒲である。だが、この子は同年の11月に夭折する。その翌年の弘化3年(1846)7月、今度は念願の嗣子・恭太郎を生む。だが、この子もまた同年9月に夭折してしまう。さらに、嘉永3年(1850)11月には、3男の淳三郎を出産する。不幸は重なり、この子もまた、2年後の嘉永5年(1852)6月に病死してしまう。黒船来航の前年のことであった。

3人の子の全てを亡くしたお蝶の悲しみは察するに余りある。が、子煩悩の象山もまた深い悲しみに陥り、幼くして他界したそれぞれの子どもたちを弔う鎮魂の記念碑や和歌を残している¹³⁵⁾。

象山刺殺に正妻お順の深い悲しみ

正妻のお順も若くして象山に嫁ぎ、彼女なりに誠心誠意、象山に尽くした。結婚年齢の若さや親子ほど開きのある年の差は、さすがに結婚に大様な江戸の社会においても異例であったかも知れない。だが、お順は、他人の風聞を全く意に介さず、また自分の子を生むこともできず、妻妾同居の武家の慣行を容認して、妾と共に多数の門人を抱え、天下国家のために東奔西走する象山を支えた気丈で賢明な女性であった。

そのお順は、象山が蟄居放免となって上洛する前年の文久3年（1863）10月、9年ぶりに江戸の老母の病氣見舞いのための、信州で象山と生活していた聚遠楼（藩家老望月主水の下屋敷）を離れ、江戸の勝家に里帰りした。象山は、これが、お順との永遠の別れになるとは夢にも思わなかった。象山は、刺殺される約一ヶ月前の元治元年（1864）6月18日、お順が無事に江戸へ到着したことを喜ぶ書簡を送っていた。

その書簡の直後、お順の下に、象山刺殺という突然の訃報が届く。悲嘆に暮れたお順は、自害して象山に殉ぜんとした。そのとき、お順は、いまだ29歳であった。そのお順に、殉死を思い止まらせ、象山の冥福を祈って生きる道を勧めた人物がいた。それは、海舟と深い親交のある幕府大目付の大久保越中守（一翁、1818-1888）であった。彼は、お順宛てに次のような書簡を寄せたのである。

佐久間先生の御変、内々只今金之助より承ち驚き入り候。それにつき御覚悟の趣、一応は御尤に存じ候うて、落涙いたし候。さりながら小子存じ込みには、今よりは別して御一身ご養生なされ、今晚の御覚悟の御心露も御失念これなく、長く一御工夫これあり候よう存じ候。（中略）呉々、先生お連れに相成り候御妾らと共いたし候とも、それらには聊か御拘りこれなく、他見には仏道に御入るとばかりお見せおき、何とか御心永に御工夫これあり候うてこそ、御兄様、佐久間先生とも御恥しくこれなき御事これあるべくと存じ候。必ず必ず御気短かは御無用。一度は一向きの御婦人と、世に申され候方、かえつて御都合宜しくと存じ候。よくよくお考え下さるべく候。

草々頓首

越中守

七月十八日

佐久間先生御家内様¹³⁶⁾

上記の大久保のお順宛て書簡は、元治元年（1864）の7月18日付となっており、象山が刺殺された同月7月11日から僅か一週間ばかり後のものであった。実に素早い対応であり、海舟の盟友である大久保の、お順の身を案じる優しさが滲み出ている。

その後、お順は自決を止まり、名を瑞枝^{みずえ}と改め、妾のお蝶と共に象山を慰霊し、佐久間家の継嗣である恪二郎の成長を支えながら、実家の勝家でひっそりと暮らし、明治41年（1908）11月3日、病死した。享年73。主体性の強い気丈な女性の一生であった。

お蝶の象山への献身と最期

だが、天下に名だたる偉大な学者に立身出世して、天下国家の安危に関わる八面六臂の活躍をする象山に、生涯を捧げた女性は、お順ばかりではなかった。お順の婚姻よりも前に佐久間家の召使い（妾）となり、象山の子を生んでいた、お蝶という女性の存在である。彼女は、象山にとって最初の女性（妾）であり、最期まで象山一筋に献身する健気な女性であった。他人から変人奇人と揶揄される気難しい象山の本当の素顔を理解し、10代の初めから古稀を過ぎる最期まで、象山とその嫡男（同居した後輩の妾お菊の子、恪二郎）の世話をして生きたお蝶の献身的な人生を思うとき、はたしてお蝶のような献身的な女性の一生が幸か不幸か、言い知れぬ哀愁の情に満たされる。

著名な歴史小説家である諸田玲子氏は、正妻のお順を主人公にした『お順 勝海舟の妹と五人の男』（毎日新聞社、上下2巻、2010年）という関係史料を丹念に読み込んだ力作を書かれた。その中に、研究書と歴史小説の垣根を越えて、是非とも紹介したい一文がある。それは、妾として生きたお蝶という女性の生涯を簡潔に描いた次の文章である。

蝶は、順が嫁ぐ前から象山に仕えていた。三人の子を産み、三人とも失ってなお、生さぬ仲の恪次郎^{ママ}を育てた。正妻の順にも従順に使えた。肅々と己が宿命をうけいれてきたのは、生来の性格もあろうが、象山への一途な愛に

よるものだろう¹³⁷⁾。

象山が刺殺される直前に最も多くの書簡を交わした相手は、お蝶であった。象山は、上洛でお蝶と別れた翌月に、信州の姉の家に預けてきたお蝶に宛てて書簡を認める。その冒頭は、「度々の文悦び存候」¹³⁸⁾である。さらに、象山遭難の一週間前の元治元年7月3日のお蝶宛の象山最期の書簡の書き出しは、「十日十一日十四日十八日の文ども追々届き悦び見申候」¹³⁹⁾であった。お蝶は、象山を瞬時も忘れずに案じて、頻繁に手紙を書く。お蝶には手紙を書くことしか、象山への愛の表現はできなかった。象山を想い、筆を走らせているそのときが、お蝶にとっては象山との愛の語り合いのときであった。象山もまた、愛するお蝶からの手紙を待ち望んで読み、命を狙われている物騒な京都にお順やお蝶を呼び寄せることができない辛い状況を詫びるのである（「此のせつのけしき奥や手前をよびよせ候様のことに至らず」¹⁴⁰⁾）。だが、女手なく不自由な身である故に、長引く京都滞在中だけの召使い（妾）を雇うことの許しを請うなど、「此表にて一時さしおき候ものに候へば江戸表は参り候にもまた其地へ参り候にも宿本へ返し候」¹⁴¹⁾と、象山は、いかに忙しくとも必ず返事を書くのである。

お蝶に宛てた象山の書簡は、長文で、正妻のお順にはいえない本音が綴られていた。京都で妾を持つことの理解と承認を最初に求めたのもお蝶であった。象山との年齢差が20歳と大きいのが、13歳のときに小間使いとして象山に仕え、やがて妾となって最も長く象山と生活を共にし、3人もの子を生んでくれた女性、そして別のお菊が生んだ恪二郎を母親代わりに育て上げて象山と恪二郎の最期を見届けた女性。象山にとって、お蝶は、単なる妾ではなく、母のような姉のような存在で、心底、愛する女性であったに相違ない。

そのお蝶は、象山が惨殺されたとき、愛する対象を失い、正妻のお順と共に殉死する覚悟であった。だが、残された、わが子同然で17歳の恪二郎の先行きを思うとき、何としても生きなければならなかった。彼女は、象山の夢であった恪二郎を育て上げ、佐久間家の再興を図ることをひたすらに願った。だが、その恪二郎も明治10年（1877）2月に他界する。享年29。

その後のお蝶は、お順の住む勝家を離れ、象山と恪二郎の霊を弔いながら1人で生き抜き、明治37年（1904）5月、東京市芝区浜松町で病死する。享年73。お

蝶は、妾であるが故に、愛する象山の正妻として表に出ることは許されなかった。だが、愛する象山を支えて生きる日陰の妾ではあるが、幸せな女の一生であったのかも知れない。

素顔の象山は、徹底して「理」を躬行実践する合理主義の学者、悪くいえば理屈屋という表向きの顔とは全く逆で、家族や他人との普段の人間関係では、喜怒哀楽の心情を素直に表現する情愛の細やかな「情」の人であった。特に象山にとっては、両親や正妻はもちろん、妾や子どもたち、恩師や知人友人、そして多くの門人たちとの愛別離苦の感情は格別に深く、数多くの人々との別れに臨み、哀悼の情を詠んだ漢詩や和歌などを数多く残している。

英国の経済学者ケインズ (John Maynard Keynes, 1883-1946) が、恩師マーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924、英国経済学者) の人物評に記した名句を借りていえば、象山の表裏を兼ねた全人的な人間像は、「冷静な頭脳と人情豊かな心」(Cool Head, but Warm Heart) と表現することができるであろう¹⁴²⁾。

そのような素顔の象山であったればこそ、多くの門人や知友、そして誰よりも正妻のお順と妾のお蝶が、象山の没後も変わらぬ思慕と敬愛の情をもって象山を想起し、靈前に冥福を祈って生きたことも当然に理解できる。

V、嗣子なき故に佐久間家が辿った悲運の歴史

佐久間家の存続には嫡子が不可欠—正妻と妾の狭間

結婚して幾年過ぎても正室のお順が子を産めない以上、相応の妾を求めて嗣子の誕生を切望し、佐久間家の存続を確かなものになりたい。象山の強い願望であった。それは、特に彼が蟄居中の安政4年(1857)以降の書簡に表現されてくる。彼は、52歳で蟄居放免となり、54歳で決死の覚悟をもって上洛したのは、元治元年(1864)3月の最晩年であった。そして、同年7月に尊皇夷派の刺客に斬殺される直前の、僅か6ヶ月余りの短期間の在京中に、何としても子を産める若い妾を求め、赤子でもよいから遺して最期を飾りたいとの象山の強い願望は、知人へ妾の斡旋を依頼する書状となって遺ったのである。

一体、何故に、清廉潔白の武士道を生きる象山は、羞恥心を捨ててまで、他人に妾の斡旋を依頼したのか。膨大な象山史料を編纂した『象山全集』(全5巻)の

大半を1300通以上の書簡が占める。その中で、最初に妾の斡旋を正式に依頼する書簡は、安政4年（1857）5月、象山47歳のときのもので、地元松代の知人宛の書簡ある。そこには次のように記されている。

下女相応のもの之れ無く候や。母とも左様申、只今、妻年若く候へども子の之れ無きは生まれつき、又召使（妾のお蝶）も当年にて八年出生も之れ無く候へば是も出生は覚束なき事、何分恪二郎一人にては事足らぬ限りにて（中略）せめては男子にて兩三人も欲しく候。依て此度下女を召抱へ候も妾に成り候ものに致し度候¹⁴³⁾。

上記の文章で明かなことは、象山が「下女」(妾)を求める理由が具体的に理解できることである。①正妻の順子が生まれつき子どもを産めない女性であること、②現在、同居中の「召使」(妾のお蝶)は嘉永3年（1850）11月に3男の淳三郎を産んでから8年が過ぎても出産の気配がないこと、③佐久間家にいる男子は恪二郎一人で心許なく、万一の場合に備えて男子3人はほしいこと、以上の3点であった。

この年は、米国総領事ハリスと日米修好通商条約を締結する前年で、外国との条約締結に勅許の有無を巡って政治が混迷する激動の時代の渦中であった。象山は、公武合体や彦根遷都の政治活動、条約締結や横浜開港などの外交問題、留学生派遣や外国人御雇教師の招聘などの文明開化などの所説を、山階宮（晃親王、1816-1898）や中川宮（朝彦親王、1824-1891）の公家や一橋慶喜や将軍家茂などに説き回るなど、幕末期の政治動向に深く関わる「洋学かぶれ」とみなされ、攘夷派の格好の標的とされていた。象山も身の危険を察知していたのである。それ故に、いつ自分の身に何が起きるか分からず、恪二郎1人では佐久間家の存続はとてども覚束なく、赤子でもよいから、せめて男子3人は欲しい。そのためには何としても新しい下女を妾として召し抱えたい。これが死を覚悟して政治活動に奔走する晩年の象山の偽らざる本心であった。

年老いた実母と佐久間家の将来を相談して決めた、この梅田屋主人宛の書簡は、他のものとは違い、末尾に「梅田屋殿 内覧」とだけ記され、差出人である象山の名前は記されていない。内々で読み、たとえ他人にみられても差出人がわ

からないようにとの気配りがなされた私信ということである。この書簡は、象山47歳のときのもので、これを初めとして、以後、妾を依頼する書簡が、元治元年（1864）7月に京都で斬殺される直前まで、数通、書き残されている。

次に紹介する書簡は、安政6年（1859）4月、49歳の象山が、蟄居中に妻の順子の承諾を得て、知人に「召使い」（妾）の紹介を依頼した書簡の一節である。内容的には、正室である順子の承諾を得て妾のお蝶に依頼した内容であること以外は、前述の安政4年（1857）の書簡と何ら変わらない。だが、佐久間家を継承する男児の出生を切望する象山の、危機感の漂う焦りの真情が滲み出ている内容ではある。

相応の妾になるべきもの索し居候事、その家内にも承知にて……是迄子女四人出生候へしかども恪二郎一人残り候のみ、只今の召使（お蝶）の腹は三人とも当歳又は三歳にて皆驚風様（急性脳膜炎）の病にてなくなり、其以来十年余も出生も無之候へばもはや出生之れ無きに極まり候¹⁴⁴。

江戸時代の諺に「足らず余らず子三人」「三人子持ちは笑うて暮らす」とあるが、象山も恪二郎の他に一兩人の男児を残し、佐久間家の安泰を確かなものにして死にたいと、上洛後に京都で斬殺される直前まで願っていた。佐久間家を継承した象山は、何としても嗣子を遺して御家の存続を図らなければならないと、歴代当主が背負った重い責任観を抱いて生きてきたのである。そのためには、御家の存続を受け継ぐ複数の男子の存在が不可欠で、そのことが晩年の象山の最大の達成すべき課題であった。

次の書簡は、万延元年（1860）9月25日付で、象山50歳のときのもものと推定できる。内容は、前掲の書簡と変わらないが、血統がよく伶俐で顔色の良い健康美人を望むと、妾となるべき女性の条件を具体的に記している点に特徴が認められる。

子供をば多く持ち申度、兼々望にて候所、男女四人迄之れ有り候ひしかども三人なく成候て、只今は恪二郎一人に相成、誠に心細く候。依て相応のものを得候て、責ては男女に限らず今兩三人ほしく存候。故に召使も血統をば

撰み申度、又子供之れ有り候ても不才にては困り申候。子は多分其母に似候もの故に伶俐の女子に致し申度、顔色人に勝れ候程のものは多く其才も人に越え候ものに付、見悪くからぬをと望み候¹⁴⁵⁾。

天下に令名轟く高名な学者に大成した象山が、如何ほど自分の優秀な血統を受け継ぐ子どもを残し、佐久間家の安泰を図ろうとしていたか。その切実な願いを、象山は、死の瞬間まで抱き続けていたのである。そのことが、次の文章でよくわかる。それは、元治元年（1864）7月3日、すなわち同年同月の11日に斬殺される8日前に、物騒な京都から信州松代で待つ正妻のお順と妾のお蝶の両者に宛てた、54歳で最期を迎えるとき、決死の覚悟をした象山の素直な心情を切々と訴えた最後の書簡の一節である。

かねて手前も知り候通り、今一兩人の子どもをのぞみ居候所、わかき内ならば一年兩年何とも思ひ申さず候へども、年致し候所にては一年も半年も誠にをしく、いかう年のよらぬ前に生れ候ものならば生れ候様致し度、土地も替り人も違ひ候はゞ、久しく出生の之れ無く候もまたあるまじきにも之れ無しと存じ、かつは此みだれかゝり候世には自分のいかゞ成るべきかもはかられず、其時にはたとひ当歳の小兒之れ有り候ても其跡は夫だけ広くのこり候わけに候¹⁴⁶⁾。

象山は、自分が死ぬときに、例え男児が当歳（1歳未満）であっても、武家社会では佐久間家の家督は担保される、と考えていた。明治以降の近代社会においては、俸給は個人に支払われるが、前近代の武家社会では、例え零歳でも嗣子がいて家が存続すれば、その家に対して俸給（家禄）は支払われるのである。それ故に象山は、佐久間家を残すためには、何としても恪二郎だけでは心許なく、さらに一兩人の男児が欲しかったのである。

最期を予感したのか、象山は、陪臣の身でありながらも、天皇や将軍など高貴な方々とのお目見えが許され、公武合体・彦根遷都・横浜開港・開国交易・留学生派遣・御雇外国人招聘など、日本近代化に不可欠な様々な政治改革を説き回る多忙な日々を、京都で送っていた。象山は、西洋鞍の白馬に跨がり、西洋鞭を持つ

て、京都市中を往来していたが、内心は、御家の存続を切望して男児の誕生を待ち望む心で満たされていたのである。

だが、象山の悪い予感は的中する。前述の元治元年7月3日付「お蝶宛書簡」を書いた8日後の7月11日、山階宮邸から帰宅する途上、まだ夏の日長の明るい夕刻、尊皇攘夷派の刺客たちに襲われ、身に13ヶ所の疵を受け、無惨にも斬殺された。「此者元来西洋学を唱ひ、交易開港の説を主張し、枢機の方え立ち入り、御国是を誤候罪、捨置き難く候」(「榜書」)との大罪で「天誅」を加えた、との理由であった。時代を先駆するものは守旧の輩に断罪されるのである。

象山の死を悼んだ門人で義弟の勝海舟は、象山著『省警録』の刊行に際し、冒頭の序文に時代を達観した、次のような名文を記した。

花の、春に先だつ者は、残霜の傷ふ所となり、説の、時に先だつ者は、旧弊の吐厄する所となる。然りと雖も、先だつ者あらずんば、後るる者、何を以てか警起せんや¹⁴⁷⁾。

だが、象山の横死(非業の死)を知った松代藩は、当時、家老の真田桜山(1820-1901、幕末期の松代藩筆頭家老)を中心とする象山排除派が実権を握っており、悼むどころか、惨い仕打ちを受けたのである。象山は、馬上、背後から刀で切られ、自ら抜刀して立ち向かわなかったのは武士にあるまじき醜態(「白昼道路二斃ルハ士道ヲ失フニ坐スル」¹⁴⁸⁾)との罪状で、何と惨死の2日後、百石の知行と家屋敷の全てを召し上げ、継嗣の恪二郎を蟄居処分としたのである。これによって、佐久間家は断絶する。

象山亡き後、佐久間家の再興を担った嗣子の恪二郎は、義叔父の海舟や象山門人たちの支援を受け、義母のお順や育ての親のお蝶の愛情に包まれて、曲折を経ながらも何とか明治の新時代に生き残った。幕府が崩壊し天皇親政の新時代を迎えた明治2年(1869)2月、維新政府は、特例をもって恪二郎を給人として取立て、佐久間家の再興を許すのである。その後の恪二郎は、成人して明治4年(1871)には24歳で福澤諭吉の慶應義塾に入学、なぜか証人は福澤の最側近で中津藩士の小幡篤次郎(1842-1905、慶應義塾の塾長)であった。さらに明治6年には司法省に出仕して、愛媛県松山裁判所の判事に任官する¹⁴⁹⁾。

だが、慶応義塾の学生時代から複雑な女性関係を辿った恪二郎には、佐久間家当主として御家再興を願える嗣子を残すという責任を全うするほどの力量はなかった。偉大な親をもつ子は不幸である。恪二郎は、象山の後継者に相応しい優れた才能があったわけではなく、慶応義塾への進学や司法省への仕官なども、叔父である勝海舟や象山門人たちの物心両面での支援があつてのことであつた。象山没後、恪二郎は何一つ自力で切り開いたことはなかった。

特に司法省への任官に関しては、当時、同省の高官となつてゐた象山側近の門人で信州出身の渡辺 驥^{すずむ}（1836-1896、司法大丞兼大検事、後に大審院検事長）の推挙によるものであつた。渡辺は、酒乱で女性問題を起こす恪二郎の行く末を案じ¹⁵⁰、当時、愛媛県令であつた知友の岩村高俊（1845-1906、土佐藩出身、後に男爵）に監視を依頼し、東京から遠く離れた松山裁判所の判事に任官させたといわれる¹⁵¹。

実は、その恪二郎と松山で親交のあつた人物がいる。同じ信州松代出身の小松謙次郎（1863-1932、父は信州松代藩士の横田数馬、兄は大審院長の横田秀雄、同藩の小松家の養子となり、東京帝国大学法科卒、逓信次官、貴族院議員、鉄道大臣を歴任）の親しい知人で、東京赤坂在住の草間時福^{とまよし}（1853-1932、旧制松山中学校初代校長）¹⁵²という人であつた。その人は、恪二郎の翌年に慶応義塾を卒業したばかりで松山英学校に招聘され、明治8年（1875）には松山藩校が県立の松山英学所に移管されて初代所長（校長）となつた。だが、その翌年3月、同氏は、政府の忌避に触れる筆禍事件を起こし裁判となる。何と、そのときの担当の裁判官が佐久間恪二郎であつた。裁判の結果は、予想よりも軽い禁錮2ヶ月罰金50円という恩情ある判決を受ける。この裁判を契機に恪二郎と親交を結んだ草間は、象山の継嗣である恪二郎を「恪氏は遺に象山先生の息子だけあつて議論の筋もよく、立派な裁判官であつた」¹⁵³と回顧している。

しかし、恪二郎は酒を飲むと我を忘れて暴力沙汰を起こす性格であつた。その恪二郎は、明治10年（1877）2月26日、任地の松山の料理屋「涼風亭」で「鰻を食ひ、その中毒で死んで了つた」¹⁵⁴という。余りにも若い死であつた。享年29。これをもって、象山が恥じも外聞もかまわずに拘り続け、嗣子誕生の妾を最期まで求めた心配が的中し、象山の最も恐れた佐久間家の断絶となつた。恪二郎の死によって佐久間家は、以後、再興することはなかった。

おわりに 日本近代社会の家制度と妾の役割

嗣子誕生を切願して「妾」の斡旋を求めた晩年の象山

前に述べたごとく、研究者の中には、生理的に象山を嫌悪し学会発表や論文・著書などで、象山の人格批判を展開する人がいる。批判の論点は決まってステレオタイプで、女性問題（妾問題）の指摘であった。戦後日本の民主主義社会における男女平等の理念に基づく一夫一制を判断基準として、没後160年近くも前の幕末期を生きた象山が、公然と「妾」の周旋を依頼したことを、象山に内在する思想の封建性として指摘する研究者がいるのである。

たしかに象山は、書簡等で数人の知人に「召使い」(妾)の紹介を依頼しており、『象山全集』(全5巻)で確認した限りでは、生涯にトータルで4人の側室(妾)が存在した事実が認められる。しかし、実数は3人であり、それも彼女たちは同時期における妻妾同居ではなかった。また、象山は、誰彼かまわず不特定多数の人々に「召使い」(妾)の斡旋を依頼したわけでもなかった。極く親しい信頼のできる数人の知人に、書簡をもって切々と「召使い」(妾)の必要性を説き、周旋を依頼したのである。特に妾の周旋依頼は、彼が長い蟄居生活から解放され、幕命を拝して動乱の都に上洛する50歳を過ぎた最晩年に集中している。54歳の誕生日を迎えた翌月の元治元年3月、一死報国の覚悟で京の都に上った象山は、頻りと自分に万一のことがあった場合の佐久間家の存続を案じ、恥じも外聞も忘れて健全な嗣子を残してくれる女性の紹介を知人に依頼したのである。

象山が、正妻である順子と長年連れ添った妾のお蝶の承認を得て、京都での「召使い」(妾)の斡旋を依頼したのは親しい友人数人に宛てた書簡だけで、それ以外の文章には「召使い」(妾)の文字は出てこない。本来、相互の信頼性に基づく秘匿性の遵守を原則とする私的文書である書簡は、決して不特定多数の人びとに公開されるべき情報ではない。だが、幸か不幸か、歴史的な偉人と崇められる人間となったが故の代償か、没後の「全集」の編纂・刊行となれば、妾の周旋依頼の書簡までもが、誰でもみることのできる象山史料として「全集」の中に収められたのである。その結果、例え秘匿されるべき私信とはいえ、天下一等の学者となった象山は、何故に知人に書簡をもって妾の紹介を依頼したのかを疑われ、変人奇

人と評される象山の好色性や守旧性が強調されることとなった。

たしかに、男子たる者の好色性を全否定することはできない。江戸時代にも男女関係の在り方には様々な形があった。井原西鶴の処女作『好色一代男』(1682)の主人公・世之介のように、好色遍歴の人生を生き抜いた男は、国境を超え時代を超えて、いつの世にも存在するであろう。

だが、象山のように、武士が妾を求めることの本質は、単なる好色性からだけではなかった。特に厳格で几帳面な学者の武士であった象山は、後述する勝海舟や洪沢栄一の場合とは異なり、極めて真面目に本心を吐露し、何としても栄誉ある佐久間家の武門を継承する嗣子が欲しかったのである。象山は、嗣子なき故に御家の断絶や減禄を幾度も経験して生き延びてきた佐久間家代々の悲劇を、幼少期より父母から言い聞かされて脳裏に焼き付け、それを原動力として天下一等の学者をめざして成人したのである。ひたすらに佐久間家の家門の存続を切望して生きる武家の象山が、家門の存続のための嫡子誕生を願って妾の周旋を依頼した事実は否定できない。天皇家や将軍家など高貴な公家や武家の場合も同様で、嗣子の誕生は天下の一大事である。近世の家社会において武門を継承し嗣子の誕生という重荷を背負って生きた象山の場合も、その人生は実に悲愴であり、悲哀すら感じさせるものであった。

門人勝海舟と恩師象山における妾問題の異同

たしかに偏狭な歴史理解の故に、妾の問題で象山思想の近代性を批判し否定する研究者が存在する。だが、幕末動乱の時代を生きた象山は、アヘン戦争当時の天保期という早い時期に、藩校設立による藩学教育の改革、女子の小学教育の義務化と女子教育における算学学習の重要性の提起、そして黒船来航の前に蘭語を習得して西洋近代科学の様々な実験的検証による積極的な西洋文化の受容を提起、蘭日辞典の編纂刊行による西洋知識の普及拡大、西洋砲術・西洋兵学の西洋軍事科学を中心とする私塾教育の実践と数多の人材育成、さらに黒船来航後は開国和親と横浜開港、留学制度や御雇外国人教師の招聘、等々、世界の中の日本というワールドワイドな観点から「東洋道徳・西洋芸術」思想を各方面に展開した。まさしく象山は、日本近代化の羅針盤となる「東洋道徳・西洋芸術」という思想を実践躬行した日本近代化の先駆者であった。

その象山を支えていた精神的支柱（アイデンティティ）は、栄えある武家に生まれ育った武士道の精神であった。彼は、自らが継承した佐久間家を、何としても次の代に継承させるべく、子を生めない本妻の他に、妾を切望して嗣子の誕生を願い続けた。だが、不運にも願いは叶わず、佐久間家は御家断絶となったのである。

江戸の幕末期も近世社会の延長上にある家制度の社会であった。有限な存在である人間は、家が存続してはじめて、その存在が担保される。すなわち、人間は、家を媒介として、有限な存在を無限化することのできる唯一の動物なのである。人間にとって、生と死を繰り返して永遠と繋がる場が家であり、それ故に家は永遠であり絶対的な存在なのである。人は有限、家は無限。それ故に、婚姻によって家を継承する嗣子の出生が切望されるわけである。正妻が子どもを産めない場合を想定して、妾（身分により、側室、使用人、召使い、女中、下女など、様々な呼称）を囲うことは、幕末期といえど江戸時代においては、法的にも社会的にも否定されることではなく、天皇家をはじめとする公家や将軍家を筆頭とする武家社会ではもちろん、一般の庶民社会にも広く普及し定着した慣習一家制度を存続させる智慧一であった。

ここまで、象山の妾の実態を追求してきた。だが、実は、門人で義弟の幕臣旗本・勝海舟にも象山を凌ぐ妾がいた。彼女たちは、それぞれに海舟の子を生んだのである。明治維新の際に江戸城の無血開城という大業をなし遂げた偉大な武人である海舟の場合、妾の存在はあまり、というか全く問題とはされない。無役の貧乏旗本の子であった海舟は、剣術・儒学・蘭学などを修業中の23歳のときに、江戸神田の商家の娘（お民）を嫁に迎える。3歳年上の姉さん女房で、大胆不敵で豪放磊落な政治家の海舟を支え、彼の妾たちの生んだ子どもたちも実子同然に育て上げた、気丈な良妻賢母であった。海舟が抱えた妾は、史料に裏付けされて公表されているだけでも5名いた¹⁵⁵。増田糸（お糸）、小西かね（お兼）、梶玖磨（お久）、清水とよ（おとよ）、森田米子（お米）。彼女たち妾は、全て正妻お民の認めるところであった。特に海舟の身の回りをするお糸と、台所の責任者で料理上手なお兼の2人は、妻妾同居であり、共に海舟の子どもを産んだ女性である。また、海舟が海軍伝習所に学んでいた長崎時代に妾となったのが15歳のお久で、彼女は3男の梅太郎を産んだ。さらに第4が、海舟の晩年に妾となった自邸

(赤坂氷川)の近所の旧幕臣の娘おとよであった。彼女も海舟の女(妙子)を産むが、それは明治18年(1885)3月、海舟が63歳という晩年のことであった。そして第5番目の妾が、海舟の別荘(木下川梅屋敷)の管理人をしていたお米という女性であった。

叙上のように、妾を持つことに関する動機や目的、待遇や配慮などの面で、象山と門人海舟との間には異質なものがある。傲慢不遜といわれようとも、象山は真理探究の学者であり、豪放磊落な海舟は政治家であった。学者と政治家、この両者の生き方の相違が、妾の持ち方や関わりの相違を生むといえるのかも知れない。

膨大な『勝海舟全集』(全23巻)を編集した勝海舟研究の第一人者である倫理学者の勝部真長(1916-2005、お茶の水女子大学名誉教授)は、単独でも『勝海舟』(上下2巻)という大著を著し、その下巻に「海舟をめぐる女性たち」という一節を設け、正妻のお民に関してはもちろん、判明する5人の妾についても詳述している。そこには勝部が勝海舟研究で得た、「男は、なにか命をかけた仕事に取り組み緊張感にあふれたとき、新しい女に手を出すことがある」¹⁵⁶⁾との名言が記されている。言い得て妙である。また、西郷隆盛は、象山と海舟の師弟を比較して、「学問と見識においては、佐久間抜群のことに御座候へども、現事に候ふては、この勝先生とひどく惚れ申し候」¹⁵⁷⁾と述べ、現実的な政治家としての勝の能力を高く評価した。妾の問題に関しても、根拠のある正統な理論をもって理路整然と弁解する学者の象山は、余りにも几帳面で生真面目すぎた。現実社会には非合理や不合理なことが沢山あり、弁解する必要のないことも多い。歴史上における、その最たる事柄が男女の問題、すなわち妾の問題であった。

近代日本を生きた渋沢栄一の妾問題の現代的な意味

ところで、象山や海舟と重なり合う幕末維新の時代を生き、令和3年(2021)のNHK大河ドラマの主人公である渋沢栄一(1840-1931)。彼は、生涯に約500もの企業の創立・経営に関わり「資本主義の父」と称される近代日本の殖産興業の偉大な恩人である。だが、その反面、彼は、非常好色家(好色漢)としても有名である。妻妾同居の渋沢家で、正妻の子として4男に生まれた秀雄(1892-1989)は、東京帝国大学法科大学仏法科卒業の秀才である。その彼が、栄一の没

後、『父 渋沢栄一』¹⁵⁸⁾という伝記を書き残している。同書は、親子でなければ知ることのできないこと、書くことのできないこと、などを交えて、素顔の栄一の生涯を淡々と描いている。驚いたのは、同書の本文の各所に栄一の女性問題、すなわち妾の問題が散見されることである。いくつか事例をあげればつぎのような記述である。

- ①(論語と算盤の実践者)の「父は、花柳界で遊びもしたし、妾宅も持っている。だから父は新聞や雑誌から青年子女の品行問題など質問されると、自分にそれを語る資格はないと遠慮していたほどである」¹⁵⁹⁾
- ②大佛次郎さんに父の伝記小説『激流』の執筆を依頼したとき、その冒頭に「渋沢栄一って、妾があるんだってな…」といった。すると他の一人が「渋沢さんて、人格者なんだろう？妾なんか持つかしら…」¹⁶⁰⁾
- ③父の明治42年の日記に、夜の宴会へ招かれたあとなどに、「帰途一友人ヲ問ヒ、十一時半ニ寄宿宿」と書いてある。思わず失笑したことがある。「父の一友人は、二号さんなのである」¹⁶¹⁾

秀雄は、父親の妾問題には実に寛容であった。というよりも、江戸時代に生まれて昭和の戦前まで生きた栄一の時代感覚からすれば、妾を持ち妻妾同居の家族であること、あるいは妾に別宅を用意し生活費を与えて通うこと、などに罪悪感や羞恥心を感じる日本人は極めて少なく、妾の存在は世俗的社会における資産家や成功者の象徴的な事柄と黙認されていた。そのような江戸時代を現代に引き継ぐ近代日本社会の男女関係の旧慣を、栄一は次のように記している。

古い時代の人間の倫理感覚が、性の問題には放縦なくらいにゆるやかで、明治の大臣など、ごんさい権妻(正妻でない妻、妾)を持つのが公然のこととして許されて、それが現在の社会的遺伝となって残っている¹⁶²⁾。

渋沢栄一が、正妻公認で妾をもち妻妾同居の日常生活を送り、外にも多くの妾を抱えて別宅を与えて通ったこと。それら数々の渋沢に関わる妾の問題は、近代日本における偉大な社会的成功者に認められる特権的な事例である。彼は、武蔵

国榛沢郡血洗島村（現・埼玉県深谷市血洗島）の農民出身でありながら、徳川御三卿の一橋慶喜（1837-1913）に召し抱えられて士分となり、幕末期の多難な国事に関わり財政面での異才を放った。維新後は、近代日本の財政的基礎の形成をめざして奔走したが、官に合わず公職を辞し、自由な民間世界で銀行や各種企業の創立・経営に辣腕をふるった。また、商法講習所（現・一橋大学）・大倉商業学校（現・東京経済大学）の設立に関わり、同志社大学や早稲田大学の設立や拡充にも尽力した。さらには女子の高等教育の必要性を唱えて東京女学館や日本女子大学の創立にも財政的支援をしたのである。

まさに渋沢は、実業家・教育家・民間外交家・福祉医療家、等々、八面六臂の活躍で、近代日本の国家創業時における殖産興業の財政的基盤の形成に多大な貢献をなし、近代日本の発展に偉大な功績を残した歴史的偉人である。

その「日本資本主義の父」と称される国家的な偉人の渋沢が、実は正妻亡き後に再婚するが、最初の正妻の時代から、妻妾同居あるいは別宅を構え、同時に多数の妾を抱えて晩年まで子どもを儲け、多数の子どもを残したことは公然の秘密である。それら妾の子どもを含めて、多くの子どもたちが渋沢が創業に関わった企業その他の後継者となり発展をとげた。さすれば、渋沢が多くの妾を囲い沢山の子どもを残したことは、結果的には日本の発展に人的面で偉大な貢献をしたともいえる。それ故にか、渋沢の妾問題を批判する日本人はほとんどなく、管見の限りでは、その種の論文や著書はみあたらない。

ところで、その渋沢の場合は、御家存続のための嗣子の誕生を一途に切願した悲愴な象山の場合とは、妾を囲う動機や意味が全く異なっていた。渋沢は、男女間における性の本質において妾の存在の意義を体認し、そのことに恥じらうところはなかった。だが、朱子学者として武士道を生き抜く象山の場合は、妾を娶ることの女性観に関して、公私を分かつた愚直で気苦勞が絶えなかった。しかし、世俗世界の政道を生きた海舟の場合は、妾問題でも豪放磊落で全く気にせず、そして実業界の商人道を生きた渋沢は実に賢明であった。象山・海舟・渋沢、時代を共有した彼ら3人の妾との関係性は、三者三様、実に対照的であった。

象山生誕後200年以上が過ぎ、象山が刺殺されて亡き後でも160年近くの歳月が流れた。今、世界の婚姻制度は、象山の生きた幕末期とは様変わりし、同性婚を含めて多種多様な形態が存在する。アフリカ諸国やイスラム社会に多い一夫多妻

制、ヒマラヤ山麓にみられる一妻多夫制、日本をはじめとする東アジア社会にみられる旧態依然とした妾の存続、さらに近年では日本でも夫婦別姓や同性婚も現実的な社会問題となっている。

しかしながら、現代日本における婚姻の原則は、民法第732条の「重婚禁止の規定」に基づき、婚姻は一夫一婦制であり、古代以来、長きに亘って存続した妾制度の慣習は法的に否定され、人権と自由が平等に保障される男女平等の夫婦社会となった。だが、現代日本の民主主義思想の視座から、全く人間存在の法的システムの異なる幕末期の厳しい家制度の時代を生きた象山にみられる妾制度を、批判し否定することは、存在した歴史的な事実や慣習を否定し冒涇する誤った時代錯誤の見方である。

過去を否定して現代は存在しえない。だが、現代という今は絶対ではなく、過去を断罪する基準ともなりえない。現代もまた過去に連なる相対的な時間の流れの一瞬であるからである。そのような相対的な現代を基準として過去を捉えることは、「過去の現代化」である。いかに時代が変転しても、事実を事実として捉えることを第一義とする歴史理解の本質を、歴史学に関わる人間は否定することはできない。

【注記】

- 1) 国立国会図書館デジタルコレクション『新律綱領』(上巻、32頁)に「二等親図」が記されており、「妻妾」すなわち「妻」と「妾」は「二等親」で同等と規定されたのである。
- 2) 村上一博論文「明治後期における妾と裁判」(明治大学『法律論叢』第75巻第2・3合併号、2002年、84頁)。
- 3) 本稿で用いた最大の基本史料は、象山研究の原典である増訂版『象山全集』(全5巻、信濃毎日新聞社、1934-1935年)である。以後、出典の注記に際しては、単に『象山全集』第〇巻、〇〇頁と略記する。
- 4) 象山の家系理解に関する史料は、象山自身が編集した『神溪佐久間府君年譜』『佐久間氏略譜』(『象山全集』第1巻「象山浄稿」所収)を中心に、宮本伸『佐久間象山』(岩波書店、増訂版、1940年)に収載の「佐久間氏略譜」、大平喜間多『佐久間象山』(吉川弘文館、1959年)の「家系及び血統」の項、等々を参照して論述した。
- 5) 後述するように、幕末洋学史研究者の佐藤昌介(1918-1997、東北大学名誉教授)は、『洋学史の研究』(中央公論、1980年)その他の研究専門書で、象山の妾問題を指摘し厳しく批判している。また、同氏に傾倒する数学者の川尻信夫(東海大学名誉教授)も、

立教大学で取得した数学の学位論文を補訂した著書『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面－内田五観と高野長英・佐久間象山－』（東海大学出版会、1982年）で、佐藤と同様に生理的次元での嫌悪感をもって、象山の学問批判や妾問題を指摘している。

- 6) 同上、宮本仲『佐久間象山』、630頁。
- 7) 同上、宮本仲『佐久間象山』、630－640頁。
- 8) 大平喜間多『佐久間象山逸話集』、信濃毎日新聞社、1948年。
- 9) 同上、大平喜間多『佐久間象山逸話集』の「妾を周旋して呉れ」、303頁。
- 10) 山路愛山『佐久間象山』、東亜堂出版、明治44年（1911）。A 5判274頁。
- 11) 象山全集は2度刊行されている。最初の全集は信濃教育会編纂の上下2巻本で、東京の尚文館から大正2年（1913）に出版された。両巻とも1,100頁を超える膨大な豪華本であった。
だが、この2巻本の全集には収録されていなかった象山関係の各種史料が大幅に増補改訂され、同じく信濃教育会の編纂で、今度は信濃毎日新聞社から全5巻本（各巻700頁前後）で再刊された。それが、増訂版『象山全集』（昭和9－10年、1934－1935）であった。昭和の戦前に増訂版が刊行されて以降は、象山研究のほとんどが増訂版『象山全集』（全5巻）を使用するようになった。
- 12) 奈良本辰也・左方郁子『佐久間象山』清水書院、1975年、90－94頁。
- 13) 同上、奈良本辰也・左方郁子『佐久間象山』、90－91頁。
- 14) 『象山全集』第4巻、嘉永5年11月27日付「竹村金吾宛書簡」、95頁。
- 15) 源了圓『佐久間象山』（PHP研究所、1990年）。なお、同書は2022年7月、吉川弘文館より「読みなおす日本史」の一冊として復刊された。
- 16) 同上、吉川弘文館版『佐久間象山』、128頁。
- 17) 同上、吉川弘文館版『佐久間象山』、129頁。
- 18) 『象山全集』第4巻、嘉永5年11月27日付「恩田頼母宛書簡」、98頁。
- 19) 江戸時代の後期には晩婚化が進み、「十八、十九世紀における平均初婚年齢は、男性二五～二八歳、女性一八～二四歳」となり、それ以前より「男性で二歳、女性で三歳程度」上昇したといわれる（渡辺尚志『百姓たちの江戸時代』（筑摩書房、2009年、9頁）。
- 20) 松本健一『評伝 佐久間象山』（上巻、中央公論新社）、185頁。
- 21) 22) 前掲、佐藤昌介『洋学史の研究』、176頁。
- 24) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、199頁。
- 25) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、204頁。
- 26) 27) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、205頁。
- 28) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、207頁。
- 29) 30) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、213頁。
- 31) 32) 33) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、219頁。
- 34) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、231頁。
- 35) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、236頁。
- 36) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、243頁。
- 37) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、243頁。
- 38) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、246頁。
- 39) 例えば源了圓に対しては、「源氏の場合は詳証術イコール数学」と理解し「象山の数学研究は日本の近代化過程そのものに影響を与えたとまで評価」（前掲、川尻『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、282頁）していると批判している。

また、植手通有の象山理解に関しても、川尻は「証詳術（数学）は万学の基本なり」（佐久間象山『省響録』）という表現を、「象山の学問全体を評価する一つの根拠」にしていると批判し、「内容やプロセスの追求を抜きにして彼の片言だけを取り上げ、逆にこの言葉の現代的解釈を根拠として彼の学問に対する態度を論じて、何の説得力も持たない」（前掲、川尻『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、282-283頁）と批判している。この川尻の植手批判の文章は、まさに川尻の「天に唾する」研究態度と言わざるをえない。

- 40) 前掲、川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、283頁。
- 41) 前掲、川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、286頁。
- 42) 前掲、川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、294頁。
- 43) 前掲、川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、296頁。
- 44) 前掲、川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、297頁。
- 45) 前掲、川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、306頁。
- 46) 前掲、川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、311-312頁。
- 47) 前掲、川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、315頁。
- 48) 前掲、川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、317頁。
- 49) 50) 前掲、川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面』、308頁。
- 51) 前掲、佐藤昌介『洋学史の研究』、244頁。
- 52) 前掲、『象山全集』第5巻、万延元年4月27日付「恩田頼母宛書簡」、215頁。
- 53) 前掲、岩波文庫版『省響録』、23頁。
- 54) 前掲、佐藤昌介『洋学史の研究』、245頁。
- 55) 前掲、『象山全集』第5巻、元治元年4月11日付「姉宛書簡」、669頁。
- 56) 同上、『象山全集』第5巻、元治元年6月18日付「お蝶宛書簡」、711-712頁。
- 57) 58) 59) 前掲、佐藤昌介『洋学史の研究』、246頁。
- 60) 川尻が批判した丸山真男の象山研究論文「幕末における視座の変革—佐久間象山の場合—」は、当初は昭和39年（1964）10月、長野県の信濃教育会主催の象山没後百年記念の講演原稿（テープ起こし原稿を推敲）であった。数学重視の数理的視座や武士道的視座など、従来ない象山分析の新しい視座の提示などで、好評をえた。同原稿を、丸山は翌年5月に雑誌『展望』（同年5月号）に転載、さらに同論文は、著書『忠誠と反逆—転換期日本の精神史位相—』（筑摩書房、1992年2月）に収められ、多くの研究者の注目を浴びたのである。

また、川尻の批判対象とされた丸山門下の植手通有には、『日本近代思想の形成』（岩波書店、1974年）の第6章「佐久間象山における儒学・武士精神・洋学」という象山研究の力作があり、その後、同論考は岩波書店「日本思想大系55」の『渡邊華山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』（岩波書店、1996年）に、長文の「解説」論文（652-685頁）として収録された。植手は、恩師丸山の研究を継承し発展させた斬新な象山研究者で、幕末政治史研究の進展に貢献した。

丸山・植手の両氏とも、象山が、蘭語「wiskunde」（ウイスキュンデ）を「証詳術」という日本語訳で「数学」と理解し、西洋近代科学を支える諸学問の基礎学と捉えている象山の合理主義・実験主義の思想的特徴を近代性として評価している。

だが、数学者である川尻は、象山の学んだ数学は、とても「学」とは呼べない「計算の技術」で、西洋数学の「wiskunde」（ウイスキュンデ）とは比較にはならないと否定し、丸山や植手が、象山の西洋数学の理解の仕方を近代思想として評価する観点を厳しく批

判しているのである。

- 61) 森有礼をはじめとする幕末薩摩藩の英国留学生については、犬塚孝明『薩摩藩英国留学生』(中公新書、1974年)・『森有礼』(吉川弘文館、1986年)を参照。なお、森有礼に関する基礎史料には、大久保利謙編『森有礼全集』(全3巻、宣文堂書店、1972年)があり、以下の本稿における森に関する事項に関しては、同全集の史料を参照した。
- 62) 森の略歴に関しては犬塚孝明『森有礼』を参照した。なお、大久保利謙編『森有礼全集』第1巻は英文関係史料で、その中に『Education in Japan』(『日本における教育』)や『Religious Freedom in Japan』(『日本における宗教の自由』)の原文その他の英文著書や英文レターなど、森の多数の英文原典が収められている。
- 63) 「明六社」に関しては、前掲の犬塚孝明『森有礼』(160-163頁)を参照。合わせて岩波文庫版『明六雑誌』下巻の「解説」も参照した。
- 64) 森の最初の結婚関係の史料は、『森有礼全集』第2巻所収の補遺7「結婚関係資料集」にまとめられており、そこには「婚姻契約書」をはじめ関係資料が収められている。驚くべきことに、森の結婚は明治8年(1875)1月であった。が、当時の森は28歳にして外務大丞という若き高級官僚で、「明六社」の創立者(初代社長)の地位にあり、かなり有名な人物であった。しかも森は、関係者に日本における契約結婚第一号の招待状を送り、当日は証人として福澤諭吉が陪席し、国民的関心を呼び多数の新聞に報道された。
- 65) 森の遭難事件に関する基本資料は、『森有礼全集』第2巻に「伝記資料2(遭難関係記録)補遺」として収められている。なお、哲学者でフランス文学者の森有正(1911-1976)は、寛子と再婚した翌年に生まれた三男の森明(1888-1925、日本基督伝道教会牧師)の子で、有礼の孫に当たる。
- 66) 前掲、岩波文庫版『明六雑誌』(上)、276頁。森有礼論文「妻妾論」は、『明六雑誌』の明治7年5月刊の第8号から第10号、第15号、第20号、そして明治8年2月刊の第27号までの計5回に亘って連載され、大きな反響を呼んだ。
- 67) 同上、岩波文庫版『明六雑誌』(上)、276頁。
- 68) 「明六社」の会員(社員)などの諸規定と最初の会員は、『森有礼全集』第2巻所収「明六社制規集」(明治7-同8年)に記載されている。
- 69) 石井孝『勝海舟』(吉川弘文館、1974年)所収「勝家系図、257頁その他を参照。
- 70) 注記5)にあげた佐藤昌介や川尻信夫の場合が典型的な事例である。
- 71) お茶の水女子大学『ジェンダー研究』第20号(2017年)所収の佐々木満実論文「秦代・漢漢初における〈婚姻〉について」を参照。
- 72) 前記の注記5)及び51)を参照。
- 73) 象山は、老中海防係となった藩主真田幸貫の顧問役となり、アヘン戦争を含めた西洋事情の調査分析を命じられる。その結果、横暴な覇権主義の西欧列強に対する日本防衛の具体的な対応策を建言した有名な「海防八策」が生まれた。
その第六条には、「辺鄙の浦々里々に至り候迄、学校を興し、教化を盛んに仕」とあり、男女皆学の教育立国主義による国家防衛策を提唱している(『象山全集』第2巻所収の上書「感応公に上りて天下当今の要務を陳ず」、35頁)。
この象山の教育論は、何と天保13年(1842)、象山32歳のときのものであった。さらに、この上書の2年前の天保11年(1840)には、女子教訓書『女訓』を著し(『象山全集』第2巻に全文所収)、当時の武家の封建的な女子教育論を基本としながらも、家政学上における女性の数学学習の必要性を強調するなど革新的な内容を含むものであった。
- 74) 75) 76) 前掲、宮本伸『佐久間象山』、21頁。

- 77) 象山著『女訓』は、明治27年に、信州松代の象山門人である青木直隆校注、同子息青木貫之進編輯で、東京の長島文昌堂から刊行された。A 5判14頁。
- 78) 『更級郡埴科郡人名辞典』(信濃新聞社、1939年)、113-114頁。
- 79) 『佐久間氏略譜』の他の「松代藩略系図」「松代家系譜」「本藩廢古諸家略系」「松代藩監察日記」などの佐久間家家譜に関する史料も増訂『象山全集』第1巻所収のものを参照した。
- 80) 『江戸名家一覽』、正確には『江戸現存名家一覽』は、国文学史料館所蔵「星槎ラボラトリー-眞山青果文庫」。同書9枚目右頁の藤田万樹以下の下段五人目に「佐久間商山」と記載されている。なお、「商山」という記載は、象山の発音(読み方)は正しいが、「号」としての文字記載は誤りである。
- 81) 『象山全集』第3巻、天保11年11月20日付「山寺源大夫宛書簡」、167頁。
- 82) 同上、『象山全集』第3巻、天保11年11月20日付「山寺源大夫宛書簡」、167頁。
- 83) 同上、『象山全集』第3巻、天保11年12月9日付「竹村金吾宛書簡」、169頁。
- 84) 同上、『象山全集』第3巻、天保12年正月19日付「山寺源大夫宛書簡」、183頁。
- 85) 同上、『象山全集』第3巻、天保12年2月7日付「八田喜助宛書簡」、184頁。
- 86) 前掲、岩波文庫版『省讐録』第57条、49頁。
- 87) 藩主宛の上書「感応公に上りて天下当今の要務を陳ず」(天保11年11月9日付は、『象山全集』第2巻所収の長文の「上書」、25-53頁。
- 88) 前掲、佐藤昌介『洋学史の研究』、245頁。
- 89) 従来の象山関係書の全てにおいて、象山門人と言えば増訂版『象山全集』第5巻所収の「訂正及門録」を全く疑わずに象山門人録と思い込み、そこに記された人名を無条件に象山門人として取り上げてきた。だが、その「訂正及門録」は、象山没後に門人たちが象山関係史料を収集し、あるいは共に学んだ編集者たちが記憶を想起して作成した作爲的な「二次史料」であり、象山門人帳そのものではないのである。

それ故に「訂正及門録」には、西洋砲術塾特有の原書講読の講義や野外練練ごとに参加門人(正確には演習に参加したものは皆、門人)を記載した「○○歳□□操練演習簿」という形態の門人帳が作成されている。そのために複数回、演習に参加した門人はその回数分だけ門人帳に名前が記載されることになる。そのような演習参加の門人帳史料を合成した増訂『象山全集』第5巻所収の「訂正及門録」には、当然、同一人物が複数回、記載されている「重記」「三重記」という誤謬が30名を超えるほど多く記載されている。また、門人名の誤記や帰属する藩名、身分の誤謬なども非常に多く確認できる。以上のような欠陥の多い「訂正及門」を、そのまま象山門人帳として信用し研究に活用することは象山研究の誤謬を積み重ねることになる。

ところで「訂正門人帳」と門人帳に「訂正」を付けるのは、明らかに、それが門人帳の原簿でないことを意味する。さらに、「訂正及門録」の元史料とされる京都大学附属図書館蔵の毛筆版『訂正「及門録」』には、幾人もの筆跡が認められ、複数人が門人関係史料を分担して書写し、それらを合成したのが「訂正及門録」であることが判明する。特に「訂正及門録」の編集に関わった門人たちの記憶の再生で象山門人を記載しているので、誤字脱字や帰属する藩名の誤記などの誤謬が極めて多く認められる。

叙上のような問題の経緯から、筆者は、今から半世紀以上も前から、象山門人研究に取り組んできた。特に、論文として「訂正及門録」の誤謬問題の研究をまとめて発表した、この30数年間における「訂正及門録」の誤謬の析出と訂正に関する研究の成果には、下記の10編の論文(四百字詰原稿用紙2,000枚)がある。大学退職後の現在は、それら

論文を著書に書き直す作業に追われている(「佐久間象山研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」として刊行予定)

- ①「象山研究史上の問題点(上)―特に門人帳「及門録」の理解と使用に関する問題をめぐって―」(信濃教育会『信濃教育』第1229号、1989年4月)
- ②「象山研究史上の問題点(下)―特に門人帳「及門録」の理解と使用に関する問題をめぐって―」(信濃教育会『信濃教育』第1230号、1989年5月)
- ③「門人帳資料「訂正及門録」の析出による象山塾門人の析出―「東洋道徳・西洋芸術」思想の展開―」(日本歴史学会編『日本歴史』第506号、1990年7月)
- ④「京都大学附属図書館所蔵「及門録」の内容とその問題点」(信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年退職記念論文集』、2013年3月)
- ⑤「信濃教育博物館所蔵『及門録』(毛筆版)の存在とその解説及び内容分析」(信州大学全学教育機構『坂本保富教授定年退職記念論文集』、2013年3月)
- ⑥「青木歳幸氏の京都大学附属図書館蔵『及門録』の解説紹介とその誤謬―象山門人帳史料「及門録」の比較研究(Ⅳ)―」(『平成国際大学論集』第19号、2014年12月)
- ⑦「国立歴史民俗博物館公開「佐久間象山門人帳データ『及門録』の誤謬―象山門人帳「及門録」の比較研究(Ⅲ)―」(平成国際大学『平成法政研究』第19巻第1号、2014年10月)
- ⑧「最新訂正版『象山門人帳史料』の提示と門人の全国分布」(平成国際大学法政学会編『平成法政研究』第19巻第2号、2015年3月)
- ⑨「佐久間象山の門人確定に関する先行研究の検討(Ⅰ)―井上哲次郎・宮本伸による「及門録」の紹介―」(平成国際大学『平成国際大学論集』第23号、2018年3月)
- ⑩「佐久間象山の門人確定に関する先行研究の検討(Ⅱ)―増訂版『象山全集』所収の象山門人帳「訂正及門録」の分析―」(平成国際大学『平成国際大学論集』第24号、2020年3月)

叙上の理由により、本稿で使用する象山門人に関するデータは、『象山全集』所収の「訂正及門録」を参考とはするが、筆者が作成した上記の⑧「最新訂正版『象山門人帳史料』の提示と門人の全国分布」(平成国際大学法政学会編『平成法政研究』第19巻第2号、2015年3月)を主体として用いる。

- 90) 91)『象山全集』第3巻、嘉永3年7月26日付「母親宛書簡」、585頁。
- 92) 前掲、大平喜間多『佐久間象山』、99頁。
- 93) 前掲、岩波文庫版『省響録』第57条、同書49頁。
- 94) 前掲、『象山全集』第3巻、弘化2年6月6日付「恩田頼母宛書簡」、338頁。
- 95) 前掲、『象山全集』第4巻、嘉永4年6月22日付「八田喜助宛書簡」、15頁。
- 96) 古田亮『狩野芳崖・高橋由一』(ミネルヴァ書房、2006年)、30-31頁。
- 97) 同上、古田亮『狩野芳崖・高橋由一』、28-29頁。
- 98) 前掲の注記89)の坂本保富論文、特に〈⑧「最新訂正版『象山門人帳史料』の提示と門人の全国分布」(平成国際大学法政学会編『平成法政研究』第19巻第2号、2015年3月)〉を参照されたい。
- 99) 前掲、『象山全集』第3巻、嘉永3年12月8日付「お蝶お菊宛書簡」、612頁。
- 100) 石井孝『勝海舟』吉川弘文館の「略年譜」、260頁。海舟の最初の象山入門が弘化元年(1844)という石井説には全く史料的根拠がなく信憑性に欠ける。

- 101) 江戸木挽町時代の象山私塾門人帳といわれる象山史料『訂正及門録』が、増訂『象山全集』第5巻に収録されている。この史料は、注89) に詳述したごとく、象山死後の明治期に門人たちによって作成された「二次史料」であり、誤謬が極めて多く、信憑性に欠ける史料である。
- だが、勝海舟の入門が嘉永3年であることは、『訂正及門録』以外の全集所収の書簡史料等によって確認できる故に、間違いない。詳細は拙稿「佐久間象山の門人確定に関する先行史料の検討(Ⅱ)―増訂版『象山全集』所収の象山門人帳「訂正及門録」の分析」(『平成国際大学論集』第24号所収、2020年)その他を参照されたい。
- 102) 前掲の坂本保富論文「最新訂正版『象山門人帳史料』の提示と門人の全国分布」(平成国際大学法政学会編『平成法政研究』第19巻第2号、2015年3月)、『象山全集』第5巻所収「訂正「及門録」の嘉永3年の項(762-763頁)」を参照。
- 103) 前掲、『象山全集』第3巻所収、嘉永3年7月26日付「母親宛書簡」、584頁。
- 104) 同上、『象山全集』第3巻所収、嘉永3年7月27日付「白平左衛門宛書簡」、589頁。
- 105) 前掲、『象山全集』第4巻、嘉永5年11月27日「恩田頼母宛書簡」、98頁。
- 106) 同上、『象山全集』第4巻、嘉永5年11月15日付「長谷川甚大夫宛書簡」、93頁。
- 107) 同上、『象山全集』第4巻、嘉永5年11月27日付「竹村金吾宛書簡」、95頁。
- 108) 同上、『象山全集』第4巻、嘉永5年11月27日付「恩田頼母宛書簡」、97-99頁。
- 109) 同上、『象山全集』第4巻、嘉永5年11月27日付「恩田頼母宛書簡」、97頁。
- 110) 前掲、『象山全集』第2巻、「佐久間象山先生年譜」、51頁。
- 111) 前掲、『象山全集』第4巻、嘉永5年11月27日付「恩田頼母宛書簡」、97-98頁。
- 112) 113) 114) 115) 116) 117) 同上、『象山全集』第4巻、嘉永5年11月27日付「恩田頼母宛書簡」、98頁。
- 118) 同上、『象山全集』第4巻、嘉永5年11月27日付「恩田頼母宛書簡」、98-99頁。
- 119) 同上、『象山全集』第4巻、嘉永5年11月27日付「恩田頼母宛書簡」、99頁。
- 120) 勝海舟の『氷川清話』には、「おれが海舟という号をつけたのは、佐久間象山の書いた「海舟書屋」という額がよくできていたから、それで思いついたのだ。」と記されており、国防の要は「海防」にあると考える象山は、海舟に海軍の設置を託して、この扁額を贈った(勝部真長『勝海舟』上巻、PHP研究所、1992年、394頁)
- 121) 前掲、勝部真長『勝海舟』の「海舟年譜」、526頁。
- 122) 前掲、宮本仲『佐久間象山』、634頁。
- 123) 佐久間家が再興に至らなかった理由である、象山嫡子の格二郎の象山没後における血縁者の有無の真偽を巡る複雑怪奇な経緯は、前掲の大平喜間多『佐久間逸話集』(358-380頁)に詳述されている。関係史料の分析を踏まえた大平の論評には、「逸話」を超えた信憑性が認められる。
- 124) 『象山全集』第5巻、元治元年6月18日付「妾お蝶宛書簡」で象山斬殺の一ヶ月前、713頁。
- 125) 前掲、宮本仲『佐久間象山』、638頁。
- 126) 前掲、『象山全集』第5巻、元治元年6月18日付「妾お蝶宛書簡」で象山斬殺の一ヶ月前、713-714頁。
- 127) 同上、『象山全集』第5巻、714頁。
- 128) 同上、『象山全集』第5巻、元治元年6月18日付「妾お蝶宛書簡」、714頁。
- 129) 井出孫六『杏花爛漫 小説 佐久間象山』(朝日新聞社、1983年、下巻13頁を参照。同書は「小説」と銘打ってはいるが、徹底した関係史料の調査に基づく事実関係の正確さ

が担保された歴史学者の歴史研究書を凌ぐ出来映えの見事な評伝である。

- 130) 131) 同上、井出孫六『杏花爛漫 小説 佐久間象山』、下巻、13頁。同上、井出孫六『杏花爛漫 小説 佐久間象山』、下巻、13頁。
- 132) 133) 『象山全集』第3巻、嘉永2年3月8日付「兩宮左京宛書簡」、488頁。
- 134) 135) 前掲、宮本仲『佐久間象山』、634頁。
- 136) 同上、宮本仲『佐久間象山』、634-636頁
- 137) 諸田玲子『お順 勝海舟の妹と五人の男』(毎日新聞社) 下巻、2010年、105頁。
- 138) 前掲、『象山全集』第5巻、698頁。
- 139) 同上、『象山全集』第5巻、723頁。
- 140) 同上、『象山全集』第5巻、712頁。
- 141) 同上、『象山全集』第5巻、713頁。
- 142) ケインズ著、熊谷尚夫・大野忠男訳『人物評伝』岩波現代叢書、1959年。「冷静な頭脳と温かい心」(Cool Head, but Warm Heart.)
- 143) 『象山全集』第4巻、安政4年5月27日と推定される松代藩商人「梅田屋宛書簡」、565頁。
- 144) 前掲、宮本仲『佐久間象山』、630-631頁。
- 145) 同上、『象山全集』第5巻所収、万延元年9月25日付と推定「宮崎新介宛書簡」、243-244頁。
- 146) 同上、『象山全集』第5巻、元治元年7月3日付「お蝶宛書簡」、725頁。
- 147) 前掲、岩波文庫版『省警録』の勝海舟「序」、15頁。
- 148) 「白昼道路ニ斃ルハ士道ヲ失フニ坐スル」(宮本仲『佐久間象山』、845頁)。
- 149) 象山死後、会津藩の門人山本覚馬に預けられ、父親の仇討ちをしたいという恪二郎の意志を汲んで新撰組局長の近藤勇(1834-1868)に預けられた。だが、江戸に呼び戻し、明治4年6月、福澤諭吉の慶応義塾に入学させる(宮本仲『佐久間象山』、845頁。丸山信『福澤諭吉門下』、52頁)。
- 150) 「飲酒家で然も乱に及ぶ質の人であつたから、泥酔して失策をなすことが取て珍しくなかった」(前掲、大平喜間多『佐久間象山逸話集』、350頁)。
- 151) 同上、大平喜間多『佐久間象山逸話集』、350-352頁を参照。
- 152) 前掲、丸山信編『福澤諭吉門下』、の77頁に、草間時福が慶応義塾門人として明治7年に入門。その後、明治8年に愛媛県立松山英学校教員、明治11年に松山北中学校長との履歴の記載がある。また、『人事興信録』(第8版、昭和3年(1928)年7月)にも同様の記録がある。
- 153) 154) 前掲、大平喜間多『佐久間象山逸話集』、356頁。
- 155) 勝海舟研究の第一人者である勝部真長の『勝海舟』(PHP研究所、1992年)。以下の海舟の妾に関する裏付け資料は、同書の「海舟をめぐる女性たち」、434-440頁を参照。
- 156) 同上、勝部真長『勝海舟』下巻、439頁。
- 157) 同上、勝部真長『勝海舟』下巻、56頁。
- 158) 洪沢秀雄『父 洪沢栄一』(実業之日本社、1959年)。本稿では2019年の新版を利用した。
- 159) 同上、洪沢秀雄『父 洪沢栄一』、346-347頁。
- 160) 同上、洪沢秀雄『父 洪沢栄一』、352頁。
- 161) 同上、洪沢秀雄『父 洪沢栄一』、353頁。
- 162) 同上、洪沢秀雄『父 洪沢栄一』、352頁。